鍵守のレイネ

ピヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鍵守のレイネ

【Ｎコード】
Ｎ８５７７Ｔ

【作者名】
ピヨ

【あらすじ】
冴原玲音は異彩を持つ為に人と距離を置いて生きてきた。父を亡くした彼女の支えは、失踪した母との繋がりを示す『鍵』だけ。そんな彼女が、階段から落ちた拍子に異世界へと渡ってしまう。しかも、その世界では彼女は何やら信仰の対象らしい。初対面でいきなり剣を突き付けてきた青年に保護される事になったのだが、向けられるのは厳しい視線だった。不安と混乱に陥る玲音は異世界でどう過ごすのか――――――――――ファンタジーの皮を被った気弱少女の成長記なので、世界観や設定がざっくりし過ぎです。悪しから

ず。

プロローグ1（前書き）

初めて投稿します。
至らない所も多くあると思いますが、よろしくお願いします。

プロローグ1

いつも泣いている少女がいました。
少女は回りの人達に比べ、少々異彩を有していましたので、それをからかわれてはよく泣いていました。
変じゃないよ、と怒っても皆は笑うばかりで、少女の反論は届かずに、少女はそれをいつも悲しんでいました。
そんな少女を慰めるのは、いつも母の役目でした。
優しく明るい気風の母が、少女は大好きでした。母に抱きしめられて、お母さんはその色が好きよ、とそう言ってもらえるだけで、少女はからかわれるばかりの異彩をほんの少しだけ好きになれました。

母には大切にしている鍵がありました。蒼い石の綺麗な鍵です。
少女はそれにいたく憧れていましたが、気前の良い母には珍しく、なかなかそれに触れさせてはくれませんでした。
それは母にとって、肌身から離せないほどとても大切な鍵だったのです。
あるとき母は言いました。

『これは絆の鍵なの。願いを繋ぎ、導いてくれる切っ掛け。どれだけ離れてしまったとしても、お母さんとあなたの事は、この鍵が繋いでくれるわ』

少女が鍵への憧れを強くしたその日の夜、母は忽然と少女の前から姿を消したのでした。

「冴原玲音ってウザいよね」

放課後の教室に忘れた体操着を取りに入ろうとしたとき、声が聞こえて一人の少女が扉の前でぴたりと足を止めた。

彼女こそが今しがた名前の上がった『冴原玲音（さえはられいね）』本人である。

玲音は血の気が引いていくのを自覚し、扉に手を掛けかけた所で固まった。顔が青ざめている事など、鏡を見なくても分かる。

「あー、冴原ね。全然冴えない冴原」

「うわ、ウケる！確かにあいつ全く冴えないよねー」

「根暗だしね、話しかけても俯いてぼそぼそ言ってるだけで何言ってるかさっぱり！」

「その癖、あんな目立つ髪伸ばしてさ、生意気だよね」

「あれ地毛だって言ってんでしょ？絶対嘘だよね」

少女達の馬鹿にしたような笑い声が、教室内から廊下にいる玲音にもしっかりと届く。

噂されている玲音の髪は、確かに日本人ではまず見られない、赤みを帯びたくすんだ金髪のような色をしていた。それを彼女は長く伸ばし、三つ編みにしている。前髪も目元を隠す程に長く、目立つ髪色の割に野暮ったい印象を受ける容姿だった。

「うざったい前髪で暗そうなフリしてるけど、実はかなり遊んでるんじゃない？」
「え、それウケるんですけど！『お金が無いの…おじさん、ホテル行こ？』とかね！」

それじゃあ援交じゃん、と甲高い笑い声が響いて玲音は息を呑んだ。さすがに援助交際の下りは冗談めかした口調であり、彼女を貶める為の飛躍した悪ふざけなのだろうが、それでも玲音は恐ろしかった。怒りなんてとてもじゃないが湧きそうもない。

ただただ、人の悪意が恐ろしく、扉を開けるどころか見動きすら取れそうになかった。

教室内から聞こえて来るのは、どれもクラスメイトと思われる覚えのある声だった。こんなに明確に自分に向けられた悪意を自覚した今、明日からもまた同じ教室で過ごすなど、想像するだけでぞっとする。憶病で弱い玲音は今この場からも、明日も変わらず登校しなければならないという現実からも逃げたくて仕方なかった。

「そういえば、あの子って両親いないんでしょ？」
「ああ、何か父親が死んで母親が失踪したらしいね」

思い出したように上がった話題に、玲音はびくりと肩を震わせる。その話の続きを聞きたくなかった。
早く、早くここから立ち去らねば、と思うのに凍ってしまったように足が動かない。

クラスメイト達の続く言葉に予想が付いた。それは、親戚からよく言われる言葉で、玲音の一番聞きたくない話だと容易に想像出来た。

「男と逃げたんでしょ。冴原捨てられたんだー、可哀想」

嘲笑を込めた予想通りの言葉に、凍りついていた玲音の体は瞬間的に溶けて自由になり、急激に湧き上がる怒りでかっと熱くなった。

反射的に玲音は閉ざされた教室の扉を強く叩き、その場から逃げ出した。クラスメイト達の短い悲鳴が聞こえたが、振り返らずに正面玄関を目指した。

扉を叩くなどという幼稚な行動で怒りを示したくせに、見つかるのを恐れて逃げ出す意気地のない自分が憎らしかった。

本当は教室に這入って、そんなんじゃないと叫びたかった。お母さんは男と逃げてなんていない。お父さんはお母さんを信じて待ちなさい、と最期まで母を信じていた。母を馬鹿にされた事も、捨てられたなんて言われた事も許せなかったのに、玲音にはそれを口に出して訴える事が出来ない。

家族の名誉さえ守れない自分が、玲音は悔しい。

夕暮れ時の廊下を駆ける彼女の頬を伝う涙を、赤い太陽が照らしていた。

プロローグ1（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

プロローグ2

玲音は人が怖い。
彼女の母はクラスメイト達が噂するように、玲音が七歳のときに失踪した。母が失踪したあの日から、玲音は父と二人で母の帰りを信じて待ち続けていた。温和でのんびりした気性の父は、突然姿を消した母に怒るでもなく、母がいつ帰って来てもいいようにと母の食器や持ち物をいつも大切に管理していた。そんな父が玲音を励ましていたから、安心して母を信じて待つ事が出来たのだろう、と今になって思う。
玲音は母が失踪して以来、その目立つ髪を伸ばすようになった。母から継いだ髪は、褪せる事なく母との思い出を思い起こさせた。

長くなれば長くなるほど髪は目立ち、地毛にも関わらず幼い頃に『変な髪』と呼ばれたそれは、年を経る内に『生意気な髪』と言われるようになり、不当な怒りを買う事にもなった。それでも玲音は髪を伸ばし続けた。少しでも母との繋がりを保つために。

幼い頃は髪に関してからかわれる度に正直に怒りを示していた彼女も、時には陰湿な嫌がらせを受けるようになり、玲音は次第に髪に関する事で不満を露わにする事が出来なくなった。その代わり人の注目を集める事に怯え、人の視線を避ける為に長い前髪で顔を隠し、俯きがちに生きるようになった。自身の存在に誰も気付かないように気を付けて。そうしなければ、人の視線が恐ろしくてロクに呼吸も出来なかった。

気が付けば、玲音にとって対人関係というものは息苦しいものにな

っていたのだ。

そんな玲音を支え、見守っていてくれていたのが父という存在だったが、その父も二年前に亡くなってしまった。
以来、玲音は一人ぼっちのあの家で母の帰りを待ち続けている。

それだけが、彼女にとって唯一の希望だった。

陽が落ちて肌寒さを感じ、玲音はゆっくりと目を覚ました。
先日衣替えが始まったばかりでまだまだ暖かい日々が続いているが、流石に夜にもなると秋の訪れを強く感じられ、玲音はふるりとその身を震わせる。

悔しさに歯噛みしながら帰宅した玲音は、制服が皺になるのも構わずリビングのソファに横になって、いつの間にか眠っていたらしい。
いつの間にか、室内は暗闇に包まれていた。
ソファの上から上半身を起こして、カーテンの開け放たれた窓の外へ視線をやる。夜はすっかり更けていて、空では星が瞬いていた。
その星があんまり綺麗で、自身の触れられないその場所で輝く光を見ていると、玲音は何故だか無性に虚しくなった。

窓から外灯の光が差し込んでいるが、家の中には一つも明かりが点いていない。この家には彼女しか住んでいないので、玲音が明かりを点けなければそれは当然の光景だった。
玲音は父が亡くなって以来、一人で家族との思い出があるこの家に住んでいる。父の弟夫婦が引き取ってくれるという話も出ていたのだが、玲音はその申し出を断ってここに住んでいた。叔父夫婦が本音では玲音を厄介に感じているのを、彼女は察していた。

天涯孤独の身である母との結婚に反対していた叔父夫婦とは元々折り合いが悪く、この家に残る事を決めた玲音は生活費や学費など金銭面の管理では叔父夫婦を頼っているが、それ以外ではお互いに干渉しない事が暗黙のルールだった。
玲音自身もその事には納得していた。疎まれながら誰かと過ごすよりは、生まれ育ったこの家で母の帰りを待っていたかった。

「平気…」

玲音は自身に言い聞かせるように小さく呟く。いつか母が帰って来てくれるのだから、寂しくなんてない。
自身を安心させる為に玲音は胸元に手を伸ばす。母が失踪する直前、彼女は母から『鍵』を受け取っていた。母が『お守り』と言って大切にしていたそれは鍵としての実用性があるものではなく、母がそうしていたように玲音もチェーンに通していつも首から下げて大切にしていた。しかし、ワイシャツの隙間から手を差し入れて、慣れたチェーンの感触が無い事に愕然とする。

「嘘!?やだ、ない、ない!鍵が、どうして…!」

血の気が引いた玲音は慌ててソファから立ち上がり、リビングを出て鏡のある洗面台を目指した。一目散に廊下を突っ切り、少々乱暴に洗面所の電気を点ける。
あの『鍵』は、母から絶対に手放してはいけないと言いつけられていたものだった。幼い頃、母の鍵に憧れていた玲音に、母は大切にしてくれる事を条件に『鍵』を譲ってくれた。その『鍵』を失ってしまう事は、また一つ母が遠くへ行ってしまい、孤独に近付いていくような、そんな嫌な予感を玲音に抱かせた。

「やっぱり、ない…」

玲音は照明の下で鏡に映った自身の首元を見て、崩れ落ちてしまいそうだった。手で触れてみても、鏡で確認してみても、やはり恐れていた通りそこには『鍵』の姿が無かった。

「やだ、やだやだやだ！どうして…鍵が、あれがないと私……あ！」

焦りから半狂乱になって頭を抱えようとした玲音は、不意に今朝の事を思い出す。朝のＨＲで抜き打ちの服装検査が行われた為に、彼女はいつもチェーンに通して首から下げているその鍵を咄嗟に体操着袋の中に隠したのだ。

思い出してみれば、一度は帰ろうと正面玄関まで向かっていながらわざわざ引き返したのは、体操着袋の中に鍵を入れっ放しにしてしまっていたからだ。

一先ず、無くした訳ではない事に安堵の息を吐いたが、だからと言って明日また登校してから回収すれば良い、と楽観的にはとても思えそうに無かった。

一度鍵が手元に無い事を意識してしまうとどうにも落ち着かない。今日に限り、校内にいる間は仕方なく体操着袋に入れたままになっていたが、それもいつでも回収できると思っていたからこそである。どうやっても朝までは取り戻せない、となると無性に心許ない気持ちになった。

あの鍵はそれくらい大切なものだ。そう思うからこそ、余計に忘れて帰ってしまうという自身の間抜けさが歯痒い。いくらクラスメイトの『あんな場面』に出くわしたとはいえ。

「どうしよう…」

呟いてはみたものの、玲音の選択は一つしか存在しておらず、彼女は迷わず踵を返して玄関へ向かった。

プロローグ2（後書き）

読了ありがとうございます。

プロローグ3

時刻は午後九時を回っていた。
学校に鍵を取りに戻ると決めた玲音は、制服のまま夜の学校に忍びこんだ。緊張を押し隠すようにブラウスの胸元を左手で抑え、教員用の勝手口から校内に侵入する。

とっくに完全下校時間を過ぎた現在は生徒用玄関も閉鎖されており、校内には宿直の教師しか居残っていないはずで、いくらこの学校の生徒とはいえ玲音の行動は立派な不法侵入だ。あらかじめ忘れ物をしてしまった、と電話の一本でも入れておけば良かったのかもしれないが、その忘れ物がアクセサリーでは呆れて叱られるのが関の山だった。

ただでさえ、今は中間テストの前で良からぬ事を考えていると邪推されかねない。玲音は生活態度こそ真面目だが、その髪色の為に教師の覚えはあまり良くない。誰もいない校内への侵入でもしもあらぬ疑いを掛けられてしまったとして、上手く言い訳できない玲音は絶対に見つかる訳にはいかなかった。

夜の校舎には玲音の足音だけが不気味響く。上履きを取りに行くだけの余裕も無く、土足で廊下を歩く程の図々しさも持ち合わせていない玲音は革靴を片手に持って、靴下で教室を目指していた。靴下越しに廊下と触れ合う鈍い足音が静かな校舎を支配している。
夜に染め上げられた廊下は窓から差し込む月明かりと、非常口の誘導灯だけがわずかな光源だった。それを頼りに玲音は進んでいくが、それでも目の前すらよく分からない薄暗さだった。

何とか階段を上って廊下を進み、玲音は四階にある１－４の教室に辿り着いた。普段使いなれた教室も夜に見ればまるで見知らぬ場所に思えたが、玲音は自身を鼓舞して窓際の自席に向かう。机の横に掛けられた体操着袋を手に取り、その中に手を入れるとすぐに目当ての金属の感触に触れ、玲音は固くなっていた表情をほころばせた。

「よかった……」

暗闇でわずかな光を放つ、珍しい蒼い石の嵌めこまれた鍵を取り出して、玲音は大切そうにそれを胸に抱きしめる。この鍵には、いつも不思議な力を感じる。それはきっと、母との絆だった。

安堵から緊張が解け、肩に入っていた力が抜ける。この達成感に身を任せていたかったが、長居をする訳にもいかないので玲音はきちんと鍵を首に掛け直し、足早に教室から立ち去ろうとした。

「誰だ！」

しかし、運の悪い事に教室から出た所で、校舎内の見回りに来ていたらしい教師に見つかってしまった。こんな事ならばいっそ、息を潜めてしばらくの間は教室内に留まっていた方が良かったのかもしれない。

「誰だ、おまえは！ウチの生徒だな？クラスと名前を言いなさい」

教師はこちらに懐中電灯を向けながら、怒鳴って距離を詰めて来る。大人しく名乗り、謝罪した方があらぬ疑いを掛けられる事もない最善の選択だったのかもしれないが、叱られる事に怯えてしまった玲音は反射的に教師に背を向け、その場から逃げだしてしまう。

「あ、こら！待て！！」

駆けだした玲音の背を、教師も同じく走って追う。一度逃げ出してしまえば今更立ち止まった所で弁明が通じるとも思えず、玲音の頭は何とか逃げ切れないだろうか、という事で占められていた。顔は見られていないと思うし、校外まで逃げればこの教師も不法侵入した生徒が冴原玲音であるとは行き着けないだろう。

玲音は真っ暗な廊下を必死に駆けるが、元々彼女の足は遅く追ってくる教師は男性で、その距離はどんどん縮まっていく。玲音が捕まるのも時間の問題だった。

廊下の突き当たりを曲がって、玲音は階段を下る。逃げるのに必死な玲音は足元を確認する暇もなく、暗闇である事も相まって記憶任せに階段を駆け下りていく。教師もそれに続いており、二階から一階に下る時、ついに教師の手が彼女に届く所まで迫っていた。

「待ちなさい！」

「きゃっ」

玲音の腕を掴もうと、伸ばされた手から逃れる為に彼女は反射的に体を捻る。何とか体勢を変えてその手をかわしたとき、その反動で階段を駆け下りていた玲音の体は空中へと投げ出された。

「え？」

「なっ！」

浮き上がった体は、瞬く間に落下に向けて重力に吸い寄せられていく。一瞬何が何だか分からなかった玲音だが、今度は助けようとこちらに手を伸ばす教師の手を見てようやく状況を悟った。彼女は頭から階段に落ちようとしていた。

宙に投げ出されているのに、滞空時間がやけに長く感じられる。普通ならば一瞬で地面に叩きつけられるのではないのか？これじゃあ、まるで、

走馬灯のよう――――――――――

その思考に玲音はぞっとする。しかし、体は動かない、表情さえも。おそらく、今こうして多くを考えている時間も現実には一瞬でしかなく、そんな暇さえないのだ。

私は死ぬの？

玲音の脳裏に最も恐るべき結果が駆け巡る。この階段は確か十二段程のはずだ。十二段で人は死ぬ？打ち所によっては危険かもしれない。頭から落ちているこの状況は？極めて危険。

自問自答を繰り返す玲音は、死にたくないと強く願った。こんな所で、独りで死にたくなかった。今彼女が死んでも誰も気付かないだろう。誰も気を払わないだろう。彼女を悼んでくれる人は誰もいない。玲音はそういう風に生きてきた。そんな寂しい死は、嫌だ。母がもしも今もそばにいてくれたなら、玲音の命を惜しんでくれただろうか。娘との別れを哀しんでくれただろうか。父を亡くした玲音には、最早母だけだった。

例えここで死んでしまったとしても、せめて最期に母に会いたかった。

玲音は胸に掛けた鍵をブレザー越しに掴む。玲音の数少ない母との繋がりだった。玲音は地面に叩きつけられる直前、その鍵に願った。最期に安らぎを求めて祈りを捧げた。

――――――お母さんに会いたい

その瞬間、鍵は不思議な蒼い光を放ち、光が玲音を包んだ。夜の闇を蒼く照らしだし彼女の体を眩い光で包んだかと思うと、張り詰めたその光が弾けた。閃光の後に再び暗闇が戻って来たと思えば、玲音の姿はどこにもいなくなっていた。

蒼い光は霧散し、残されたのは暗闇と彼女を追っていた教師だけ。

眩しい光に目を閉じた一瞬の間で追っていた玲音は姿を消し、教師は呆気に取られて腰を抜かした。

プロローグ3（後書き）

読了ありがとうございます。

見知らぬ地

初めに、むせ返るような森の香りが鼻腔をくすぐった。
階段から落ちたはずなのに、玲音の体にはこれといった衝撃はなく、その温度と手のひらに触れる感触で土の上に座り込んでいるようだと察した。衝撃に堪えようと固く閉じている瞼越しに、夜とは思えない光が感じられる。

玲音は戸惑いながら恐る恐ると目を開く。目の前では隙間なく木々が空へ伸びており、視界で緑を確認すると途端に森特有の静かな冷たさを肌で感じた。夜中だったはずなのに、辺りは昼のように明るかった。

「ひっ！」

夜中の校舎にいたはずの自分が何故森にいるのか、とそんな疑問を抱くほど冷静になるよりも早く、呆然と顔を上げた玲音は悲鳴を上げる。

彼女の眼前に刃物が突き付けられていたのだ。

それは日常生活において馴染みの深い包丁やカッターというものですらない。西洋の歴史を扱ったテレビの中でしか見た事のないような、一振りの剣だった。陽の光を受けて輝く刀身は、現実味のない存在のはずなのに一瞬で玲音から血の気を引かせる。
刀身の先、柄をしっかりと握り、彼女へ剣の切っ先を向ける人物は温度を感じさせない声を発した。

「貴様、何者だ」

その人物は意外なほど若かった。おそらく玲音より少し上くらいの年齢で二十歳に満たないだろうが、纏う雰囲気により少年というよりは青年という印象を受けた。この森のように深い緑の瞳が、その手に握る剣のように鋭く玲音を射抜いている。すっきりとした整った目鼻立ちをしているが、その容貌からは幼さを削ぎ落したような冷たい精悍さを感じられた。

服装もまた、その剣には似合うが現代では有り得ない、中世の西洋を思わせるものだった。華美さはなく、飾り気の無い意匠だが、青年の洗練された雰囲気から上質のものと察せられた。

青年は風に靡く黒髪以外、微動せずに玲音に剣を向けて言葉を重ねる。玲音は恐怖に腰を抜かし、細く荒い呼吸を繰り返すばかりで何も言葉に出来ない。歯の根が合わない、ガチガチという音だけが頭に響いていた。

「何も無い所から急に現れたように思えたが……何のつもりで俺の後ろを取った」

玲音は必死に頭を横に振る。それだけしか出来なかった。この状況も、青年が問う意味も何もかもが分からなかった。学校にいたはずなのにこんな森の中で剣を向けられ、自分の方が聞きたいくらいだった。これは一体何が起こっているのか。

こんな訳の分からない事になるくらいなら、大人しく教師に捕まっているべきだったのだ、と玲音は恐怖のあまり涙を流す事さえ出来ずに震えていた。

「何だ?その光は。何を持っている」

青年は怪訝そうな目でそう言うと、彼女の首元に手を伸ばした。そのときになってようやく、玲音は階段から落ちたときに強い光を放った鍵が、今もブラウスの下で淡く発光している事に気付く。青年がそれを手にしようとしていると理解した時、玲音は初めて抵抗らしい抵抗を見せた。

「やっ、嫌！これは…っ」

「動くな。余計な動きを見せれば斬る」

しかし、そんな玲音の抵抗も青年が剣を持ち換え、首筋に添えられた刃の冷たい感触によって阻まれる。青年が気紛れに手を捻るだけで絶命してしまう状況に、死の恐怖から指一本動かせなくなった。青年の手がブラウスの隙間からチェーンを掴み、鍵が姿を現す。蒼く光るその鍵を手の中に収め、青年は訝しげに眉を顰めた。

「ただの鍵のようだが…この光る石は何だ？一体何の……」

「ウェ、ウェスペル様…」

そのとき、青年の背後から声が掛かった。青年に怯えきっていた為に玲音は気付かなかったが、もう一人同じ年頃の少年がいた。こちらは剣を構える青年とは違い、まだ幼さの残る顔立ちをしていた。焦げ茶色の髪に青年よりも明るい若葉色の瞳をしていて、どこか生真面目そうな印象を受ける。丈の長い上衣を纏っていて、学者のような雰囲気を醸していた。

茶色の髪の少年は、背後に控えながら畏れ慄くように唇を震わせて言う。

「それは、『鍵守（かぎもり）』の鍵です。以前に文献で目にしたものに瓜二つです」

すると、剣を向ける青年は驚きに目を見開いた。青年は再び玲音の鍵を見詰め直し、少年に振り返る。

「間違いないのか？」

「はい。王家の模造品でさえここまで精巧なものは存在しませんし、何よりその蒼く発光する石。それは『鍵守』の鍵でないと有り得ないはずのものです」

「……なるほど。『鍵守』の鍵ならばこの光にも納得できる」

独り言のように呟くと青年は静かに立ち上がり、玲音の首に添えていた剣を腰に下げる鞘へと収めた。死を間近にした緊張感から解放され、途端にへたり込む彼女を青年はそのどこまでも深い森のような瞳で見下ろす。

「立ちなさい」

静謐な表情で告げる宵闇のように恐ろしい青年に、玲音は逆らえなかった。

見知らぬ地（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

謁見

ウェスペルと名乗った青年に連れて行かれたのは、世界遺産を思わせる大きな城だった。丘の上に建ち、圧倒されるほど大きく品格を感じさせる王城。

森を抜けて城に辿りつくまでの道のりも、玲音には見慣れないものばかりだった。人気の無い場所を選んで通ったようだったが、それでもちらりと見えた街並みや人は皆、中世のヨーロッパをイメージさせるものだった。服装も見慣れないものばかりで、現代の日本では考えられないような、煉瓦造りの背の低い建物が並んでいた。

やはりここはどう見ても日本とは思えない、と玲音の不安は膨らむばかりだった。何人か見掛けた人々も、彼女と共に歩く二人のように日本人とは思えない髪の色や瞳の色をした人が多くいた。あれだけ目立って孤立させていた玲音の容姿が『馴染む』と感じられるほどに。

辿り着いた城では、あまりに荘厳で非現実的な姿に不安さえ忘れてしまうほど驚いたが、そんな驚きを態度で示す暇も無く、城へ踏み入った玲音はウェスペルから女性に引き渡され、何の説明も無いまま風呂に入れさせられた。

大理石で出来た、プールか何かかと思わせるほど大きな浴槽に入れられ、メイドのような格好をした数名の女性に玲音は体を隅から隅まで洗われた。初対面の女性に裸を見られ、ましてや十六にもなって体を洗われる事に堪えがたい羞恥を覚えたが、湯浴みのお手伝いをさせていただかなければわたくし共がお叱りを受けてしまいます、と困った顔をされてしまえば頑なに拒む事も出来なかった。

風呂から上がった玲音は、それこそ昔の貴族を思わせる緑の地に黒いレースをあしらった豪奢なドレスを着せられ、髪は丁寧に結い上げられた。生まれて初めて、というほど着飾られた玲音はそして、国王陛下に謁見する事となった――――――――

案内されたのは聖堂らしい。吹き抜けの天井は半円球になっていて、等間隔にあるステンドグラスの窓から白い光が差し込んでいる。神聖な場を思わせる広間の最奥の上座の壁には一面の絵画が描かれており、髪の長い妙齢の女性と玲音の持つ鍵とよく似た物が描かれていた。

その絵画の前には、国王と呼ばれた壮年の男性が座っている。王は玲音の姿を認めるとわずかに目を瞠ったが、それ以上の反応を見せる事はなかった。王を囲うように幾人もの従者と思われる人々が立ち、国王から離れる程に武骨で剣を持つ兵士となっていった。

王座の前には赤い絨毯が敷いてあり、長く伸びる絨毯の先で玲音はドレスの裾を摘んで深く腰を落とし、頭を下げた状態で控えていた。この場に入る直前にウェスペルから、そうするように言われたのだ。

「娘、名を何と言う」

遠く離れた所から発せられたのに、重厚な王の声は十分な威圧を持って玲音に届いた。そんな人に出会った事もないのに、これが人の上に立つ者の声かと、玲音は怯えながらも納得した。その声には圧倒的な存在感があった。

「……れ、玲音と、冴原玲音と…言います…」

ウェスペルに余計な事は口にせずに聞かれた事にだけしっかりと答えるように言われていた玲音は、王の耳に届くように普段よりも大きな声で名乗ったが、その声はそれでもやはり震えてしまった。訳の分からない事ばかりで、何の説明も受けずにこんな状況に陥ってしまった自分は文句の一つくらい言っても良いはずだ、と彼女は思っていたが、気弱な玲音は大きな流れに逆らう事が出来ない。王は名乗った玲音に一つ頷く。

「……鍵については確認させて本物に間違いないそうだが、まさか今更になって鍵が見つかるとはな。という事は、その娘が『渡世の鍵守』か？」

意味の分からない話に玲音が戸惑っていると、代わりに斜め前に立つウェスペルが王の問いに答えた。

「おそらくは。私が西の森を視察していました所、何も無い所から突然彼女が現われました。伝説の通り、世界を渡って現われたのではないかと推測出来ます」

ウェスペルの言葉に、王の右隣に立つ男が神妙な顔で頷く。

「ウェスペル様のおっしゃる通りです、陛下。詳しく調べてみないと分かりませんが、そもそも鍵は、伝説では『始まりの鍵守』の娘であるリアーナ姫と共に消えたはずでした。その鍵を所有するだけでなく、渡世の能力を持つとなりますと、この少女はリアーナ姫の子孫と考えるのが妥当でしょう」

側近らしい男の言葉に、王は年齢を重ねた彫りの深い顔に難しい表情を浮かべる。顔を伏せたまま怪訝そうな声だけを聞く玲音は、反射的に震えないように自身を必死で宥めていた。

「しかし、ならば何故鍵守殿は今更になって我が国に姿を現したのだ？」

これには再びウェスペルが答える。

「憶測の域を出ませんが…彼女にいくつか質問してみました所、彼女はこの世界の常識と言える事を殆ど知りません。それと同じく、彼女の話にはこの世界では聞いた事の無い単語がいくつも現われます。階段から落ちたと思った次の瞬間には西の森にいたという話から察するに、彼女は命の危機に際し無意識に世界を渡ったのではないでしょうか。また、彼女は『鍵守』について何も知らないようです。自身が何を行ったかも分かっていません」

「という事はもしや、鍵守殿は違う世界で生まれ育ったというのか？」

「その可能性はあるかと思われます。この世界についても、鍵守についても何の知識も無く混乱しているようです」

ウェスペルの言葉を受け、王は離れた席から玲音の様子をじっと見つめている。王だけではなく、その場にいる全ての人から視線を向けられている事を察して、注目を恐れる彼女はけして頭を上げられなかった。それを思うと、ウェスペルに最初から頭を下げておくように言われたのは助かった。自然と視線を避ける事が出来る。

「分かった」

国王は明朗な声で続けた。

「我が国は鍵守殿を客人として迎え入れよう。異世界から来たというのなら分からぬ事も多かろうが、じきに慣れる。ウェスペル」

「はい」
「鍵守殿の事はおまえに一任する。この父に代わり、丁重におもてなしして差し上げなさい」
「畏まりました」

そう答え、ウェスペルは恭しく一礼する。
玲音は多くの訳の分からない話よりも、王の口にした『この父に代わり』という言葉から分かる明瞭な事実の方に驚きを隠せなかった。周りの人の態度から考えてこの王宮内で身分の高い人なのだろうか、とは思っていたがまさか王子様だったとは。玲音には馴染みの無い存在であり、この城での事など何も分からないが、それでも失礼は無かったかと反射的に考えてしまう。

「鍵守、レイネ殿。我がカルディア王国はそなたを歓迎しよう」

厳かに告げられた王の言葉に玲音はどう答えれば良いか分からず、下げる頭を深くするだけに留めた。

謁見（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

孤独の部屋（前書き）

お気に入り登録をしてくださった方がいて、感激しました！
更新頑張りますので、これからもよろしくお願いします。
登録ありがとうございます！

孤独の部屋

広間から出た玲音は、再びウェスペルに連れられて着替えをさせられた部屋のある棟へ向かった。
案内されたのは、玲音の家のリビングとダイニングを合わせたくらいに広い部屋だった。その部屋の奥には更に部屋が続いており、そちらは寝室となっているようだ。奥の部屋には紗の天蓋のベッド、手前の部屋には品の良いテーブルセットやソファなど、必要最低限の調度品が置かれていたが、生活感が無い為にここが客室であると察せられる。

「ここが貴女の部屋だ。すぐに侍女を呼ぼう。今日は貴女も疲れただろうから、ゆっくりと休むと良い」

城へ連れて来られて身支度を整えられ、王と謁見している間に高かった日はすっかりと暮れていた。時間の感覚が曖昧ではあるもののまだ夜が深まるほどではないと思われたが、夜中だったはずの場所から昼間の場所に移動して動き通しだった玲音にとっては、実質徹夜をしたようなものだった。外国に行った事など無かったが、時差とはこんなものだろうかと思う。
普段、遅くとも夜中の零時には眠りにつく玲音にとって、この一日は多大な疲労を呼ぶはずだった。しかし、分からない事が多過ぎて不安に支配される今、落ち着いて休めるはずも無い。頭が理解を求めて妙に冴えていた。
言うだけ言って部屋から去ろうとするウェスペルを、玲音は慌てて呼びとめる。

「ま、待って下さい。あの、私、分からないんです！全然、何もかも…鍵守って何ですか？『この世界』は『私の世界』とは違うんですか？私、家に帰りたいんです」

困惑ばかりを覚えた王との謁見だったが、それでも会話の中に出て来た『違う世界』という単語の奇異さには気付いていた。違う世界――つまりは異世界だなんて、そんなファンタジーな存在。玲音には信じられなかった。ましてや、自分がその異世界へ来てしまうなんて。

しかし、同時に彼女は自身が本来いた世界ではなく、ここが異世界である事を否定しきれずにいた。街にしても城にしても、衣服や容姿にしても中世のヨーロッパを思わせたが、それはあくまで玲音のイメージでしかなく、世界史の授業で習った実際の当時の風景とは全てが異なっていた。知識だけではなく、感覚の上でも『何が』とは分からないが、『何か』が違う事を肌で感じていた。

そして何より、死を覚悟したあの瞬間、玲音の鍵が光った。母から譲られた、不思議な蒼い石がついたあの鍵には元々普通ではない何かを感じていた。それを、彼女は今まで母との思い出や心が詰まっている絆だからだと思っていたが、もしかするとそれこそが彼らが口にする『鍵』の本質であり、玲音が今の状況に陥る原因となったモノなのかもしれない。

「私、家で母の帰りを待たなければいけないんです。家に、家に帰してください…！」

初対面で剣を突き付けてきたウェスペルは玲音にとって恐怖の対象だったが、こうして訴えかける事が出来る相手も他にはおらず、彼女は怯える心を押し殺して呼び掛けた。

追いすがる玲音に、ウェスペルは感情を感じさせない緑の瞳に彼女

を映し、やはり無感動な口調で告げる。

「残念だが、貴女を元の世界に帰す方法は我々にも分からない。鍵守についてはまた明日にでも詳しい説明をしよう。今は休まれなさい、顔にも疲労が窺える」

「そんなっ…せ、せめて鍵を返してください。あれは大事な物なんです。母から預かったもので、あれがないと私……」

心の拠り所である鍵が手元に無い事に、感極まった玲音の瞳にはじわりと涙が滲み、堪える為に唇を噛んで俯いた。この世界において、あの鍵は何か多大な意味があるらしく、彼女自身もその片鱗を感じてはいたが、それでも玲音にとってあの鍵はやはり、ただただ母との絆の証なのだ。

何の変哲もない、けれど欠かせない繋がりが、それだった。

父が死んでからの玲音は孤独ではあったが、それを寂しいとは思わなかった。それは、いつでも母との絆を感じていたからだ。

その絆の証が、今は手元にない。玲音の心はそれだけで寂しさに押し潰されそうだった。

「鍵もまだ返せない。出来るだけ早く貴女の手元に戻せるよう掛けあってみるが、今は我慢して欲しい」

事務的な口調でそう告げたウェスペルは、今度こそ部屋から出て行った。喪失感に苛まれる玲音は呼びとめる事も出来ず、立ちつくしたまま彼を見送る。

意味も分からず唐突に異世界に来てしまったらしい玲音は、広いだけで温もりの無い部屋に一人だった。見ず知らずの世界、土地に来て屋根がある所かこんな大きな城に部屋を用意された事を幸運と思うべきなのか、憔悴した彼女には分からない。

玲音とっては、理解や心を通わせる事が出来ない、という意味では学校や社会も異世界のようなものだった。その場にいる事を許されても、けしてその存在を受け入れられる訳ではない。彼女はどこにいても異邦人だった。

それでも堪えられたのは、鍵があったからだ。受け入れられる場所が、きちんと別に存在していたからだ。――――――――――今はその、『鍵』も手元に無い。

握るべき鍵を持たない玲音は、代わりにドレスの胸元を強く握り締めた。

孤独の部屋（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

鍵守とは、１（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます＞＜

鍵守とは、1

始まり、人は天上の楽園に住まう事を許された。
神は男を創られた。女を創られた。人は神の庇護の下、幸福な楽園で暮らしていた。
しかし、あるとき男と女は神の教えを破り、大罪を犯す事になる。
神は人の罪を深く嘆き悲しんだ。罪を犯した人は永久に楽園から追放される事となった。
神は多くの罰と共に、人を地上へ追放した。しかし、神はあらゆる罰と永遠の別れと引き換えに、人へ慈悲をくださった。

神は地上に『鍵守』を遣わされた。

鍵守は唯一地上と楽園を行き来できる存在。神と人を繋ぐ最期の絆。
人が神に祈れば鍵守は楽園におわす神の下へその祈りを聞き届け、神の教えを人々へ伝えた。鍵守は神の使いであり、人を導く教父であった。
しかし、長きに渡ったその繋がりも、いずれは途絶える事となる。
本来神に仕え、楽園の存在であった鍵守はあまりに長い時間を地上に下りた為に、しだいにその身に穢れが移り、ついには楽園に受け入れられないほど地上の気に染まってしまった。
気付いた時にはすでに遅く、鍵守は楽園ではなく、地上の存在と成り果てていた。
楽園へ渡れなくなった鍵守は、それでも人を見守る神のご意思を尊び、世界中の扉を開き、渡る事によって様々な知識を人に授けた。
やがて、人の中で生きるようになった鍵守を、人はこう呼んだ。

『渡世の鍵守』――――と。

神の使いでなくなった後も、教父で在り続けた鍵守は人々にとって欠かせない隣人である。

信じがたい事に異世界に渡って来て四日目、聞かされた物語の前半は元の世界で言う聖書のアダムとイヴを思わせるものだった。そう考えると、神の使いと謂われる『鍵守』は『天使』に相当するのではないだろうか。

それならば、と玲音はやはり自分は王達が言っていたような『鍵守』ではないのだろう、と思った。子孫とはいえ、自身がそんな神聖な存在の端くれであるはずがない。少々異彩ではあるが、彼女はあくまでただの日本人だった。

「以上が我が国に伝わる鍵守様の伝説です。鍵守様は次第に地上と楽園を渡す事は出来なくなりましたが、その代わりに他の世界――貴女様のお育ちになった世界のような異世界へ渡る事で、我ら人間へその恩恵をお与え下さいました。何でも、異世界には我々が知りえない、成しえない文明や文化があるそうですね。『始まりの鍵守様』によってもたらされたその知識で、この世界は瞬く間に発展を成したそうです」

玲音に宛がわれた私室で語り聞かせるのは、アリシア＝ルーマンと名乗る女性だった。聞けば、年齢は玲音の一つ上で十七と言うが、けして『少女』とは呼ばせない洗練されて落ち着いた空気を纏っている。
亜麻色の長い髪を後ろで一つに束ね、藍色の瞳には知性を湛えていた。

アリシアはウェスペルにより命じられて、玲音付きの侍女として彼女の世話をする事になったらしい。あのときは混乱と羞恥で人の顔などいつも以上に見られなかったが、城に来て初めて湯浴みをされたときに手伝ってくれた一人でもあるようだった。
現在、その『世話』の一環として、この世界に来た日よりは簡素ながら、やはりドレスを着せられて玲音は鍵守に関する伝説を聞かされている。何故か会話は問題なくこなせるが、この世界の文字や常識を知らない玲音にそれを教えるのもアリシアの役目だ。

「鍵守様の『鍵』は元々、楽園の扉を開く為のものだったそうです。もっとも、『始まりの鍵守様』が地上の存在としてその身を落としてからは、鍵は象徴として扱われるようになりました。ここ、カルディア王国の紋章にも鍵の姿が刻まれています」

アリシアは持参した本を机の上に広げ、付箋をしてあったページを開く。玲音にそこにある文字は読めなかったが、見開きを使って描かれている絵が彼女の言う鍵をモチーフにしたカルディア王国の紋章である、とは察せられた。

「とりあえず、ここまでで質問はございますか？鍵守様。無ければ休憩に致しましょう。といっても、何しろ大昔の伝説のお話なので分かっている事は少なく、私がお答え出来る事も限られているのですが…」

いずれは神官様に詳しい教えを乞いましょう、と言う物腰の柔らかいアリシアは、やはり大人びた様子で苦笑して見せた。しかし、人目を恐れる玲音はそんな彼女に対しても俯きがちでなければ答えらない。アリシアに玲音を拒絶する気持ちが無かったとしても。

「あの、質問とは、違うんですけど……あの、お願いが、あって」

それでも、ぼそぼそとはっきりしない口調ながらも自ら口を開けたのは、こんな玲音の言葉もアリシアは穏やかな表情で聞き入れてくれると、この数日で知ったからだ。アリシアはけして玲音を急かす事はなく、言葉の続きをゆっくりと待っていた。

「わ、私の事を、『鍵守様』と呼ぶのは、止めて下さい…私は、鍵守なんて知りません。それは、わ、私じゃない、です…」

それはずっと玲音が考えていた事だった。色んな人に『鍵守様』と呼ばれるが、彼女はその度に居心地の悪い思いをしていた。尻すぼみになりながら告げた玲音の言葉にアリシアはわずかに目を瞠って、それから穏やかな微笑みを浮かべる。

「それでは、レイネ様とお呼びさせていただきますね」

『様』という敬称も必要無ければ、自身がそんな風に呼ばれる人間ともとても思えなかったが、それでも誰を指しているのかも分からないような代名詞で呼ばれるよりは幾分ましである。玲音はわずかに顎を引く事で頷いた。

鍵守とは、1（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

鍵守とは、2

アリシアは机の上に広げられた文献と思われる三冊の本を整理しながら、世間話のような調子で口を開く。玲音から鍵守についての質問が無い事を察して、『鍵守伝説』の講義は一旦終えるようだ。

「それにしても、レイネ様がこの国の、それもウェスペル様の御前に現われたのは幸いでございました」

「え？」

「地上の存在となった始まりの鍵守様は、カルディア王国の始祖王陛下の妃に迎え入れられ、王子と姫を一人ずつお産みになったと伝わっております。つまり、カルディア国王家とレイネ様は遠い縁戚になられるのです」

アリシアの説明に、玲音はとうとう絶句した。異世界で、しかも自分が王家の人間と縁戚？まさか。叶うならばそう笑い飛ばしたいものだが、アリシアの表情は至って真面目そのもので、とても冗談を言っているようには見えなかった。

そもそも玲音は鍵守ではない。父も母も普通の日本人名を持つ、あの世界の住人だった。そんな話は聞いた事が無かったが、玲音の髪色は母譲りなのでもしかしたら母は外国人だったのかもしれないが、それでも普通の日本の主婦だった。

だから、玲音が絶句したのは、逸話まで出て来ていよいよ現実味を帯びて来た壮絶な勘違いに対して、だ。

「その縁により、カルディア王国での『鍵守信仰』は近隣国に比べ

て盛んです。ですから、レイネ様が鍵守であると察したウェスペル様は迅速に保護し、陛下は客人として迎え入れられたのでしょう。もしも、誰もいない所に、もしくは信仰心薄く伝承に詳しくない者の前にレイネ様が現われていたらと思うと、ぞっとしませんわ」

アリシアの仮定が本当になっていたとしたら、玲音は路頭に迷っていた事だろう。それこそ、ウェスペルとの初対面のように、この世界では状況によって斬られていてもおかしくなかったのかもしれない。彼の口ぶりでは、玲音は何もない空間に突然出現した不審人物なのだから。

そのときの状況を思い出し、玲音はまた密かに身震いした。

「元々、伝承に関しては城下の者にはここまで詳しく教えられておりません。鍵の存在は伝わっていても、その正確な形状を知る者は滅多におりません。おそらく、信仰心が篤い者でも、すぐにレイネ様を鍵守であると判ずるのは難しかったでしょう」

レイネ様は幸運の持ち主ですね、というアリシアに本当に運が良いのならばそもそもこんな所に来たくなかった、と思ったが、大人で優しい彼女にそんな子どものような愚痴を言えるはずもなく、玲音は眉尻を下げるにとどめる。

「それでは、すぐにお茶をお持ち致します。その後は文字のお勉強ですね……あら？」

机の上を整頓して三冊の本を抱え上げたアリシアは、首を傾げて扉の方へ視線を向ける。元の世界で英語すら苦手だった玲音は気が重くなりながらも、同じように扉に目を向けた。

「何だか騒がしいですね」

扉の向こうから、人の騒ぐ声が聞こえて来た。何を言っているのか、何人なのかも分からないが、声のトーンから女性の声であると察する。

その騒ぎは徐々に玲音達がいる部屋の方へ近付き、やがてノックもなく部屋の扉は開かれた。

騒ぎと、不躾とも言える行動を伴って現われたのは、花のように可憐な少女だった。

「こちらが鍵守様のお部屋ね」

靡くのは毛先まで手入れの行き届いた白金色の髪。アーモンド形の大きな瞳は紫色をしていて、少女の気性を表すように明るく輝いていた。白磁の肌にほんのりと色付いた頬、珊瑚色の唇は果実のように瑞々しく、薄紅色のドレスが彼女の花のような印象を際立たせる。年はまだ幼く、十代前半のように見えた。

「フィオル様!?どうしてこちらへ？」

「伝説の鍵守様というものに興味があったの。おまえ達はお下がり。心配しなくとも、わたくしはこの方にご挨拶をしたいだけよ」

驚きの声を上げたアリシアにフィオルと呼ばれた少女は軽い調子で答え、彼女の後を追ってこの部屋に入って来た侍従達をあっさりと追い出した。侍従達はフィオルを置いて出る事を渋っていたが、彼女に急かされると仕方ない、といった様子で退出していく。

「あの、この子は…」

フィオルの登場とその存在感、大胆な態度の全てに圧倒されていた玲音は、そばに立つアリシアに小声で尋ねる。玲音はフィオルのよ

うな堂々とした少女は少し苦手であり、自然と本人を避けるような態度になった。

「フィオル様――――カルディア王国の第一王女様です」

「おう、じょ……？」

再び現われた、遠い世界の話のはずの『王族』という高貴な存在に、彼女は驚きから言葉を失う。自分はついこの間までただの女子高生だったはずなのに、今度は『王女様』なんて。

そんな彼女の動揺を知ってか知らずか、その身分を明かされたフィオルはやはり花のように鮮やかな笑みを浮かべて玲音を振り返り、ドレスの裾を持ち上げて丁寧に頭を下げた。それはもう、まさに王族と感じされる気品溢れる動作で、だ。

「お初にお目に掛かります。鍵守、レイネ様。わたくしはカルディア王国国王の娘、フィオルと申しますわ」

以後お見知りおきを、と微笑む幼いながらも美しいお姫様に、玲音は眩暈がしそうだった。

鍵守とは、2（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

姫君の横暴

一目見たときから、フィオルはいかにも玲音が苦手とするタイプの少女だった。

こちらを見上げる紫の瞳は自信に満ち溢れていて、堂々とした態度の快活な口調も玲音が気圧されるには十分だった。玲音にはけして取れない態度という事もあるし、何より彼女のようなどこにいても中心人物となるような人が、時には悪気もなく、時には明確な悪意を持って玲音の色彩を『変』と判じる為に、玲音はいつも異端者として扱われて来た。

だから、玲音は反射のようにフィオルからの視線を避ける。

「あら、わたくしは名乗りましたのに、レイネ様はご挨拶してくださらないの？」

「！……あ、あの…レイネ、です。よろしく、お願いします……」

「ええ、よろしくね」

びくりと震えながら答えた玲音に、フィオルはにっこりと笑うと砕けた口調で答えた。フィオルの容姿は十三、四といった頃に見えるが、ピンと背筋を伸ばして立つフィオルと俯いて猫背がちの玲音では、どちらが年上だか分からない。

居心地悪く俯いたままフィオルに対峙していると、ふとある事実に気付いて玲音はまさか、と驚きを漏らす。

「王女様という事は、もしかしてウェスペルさん…様、の……？」

「ええ、ウェスペルはわたくし兄で、同じ王族の血を継ぐ者よ」

あっさりと答えたフィオルに、玲音は似ていない、と率直に思った。宵闇のように寡黙なウェスペルと花のように可憐なフィオルはまるで結びつかない。髪の色も瞳の色も重なる所がないので、余計に血の繋がりを実感出来なかった。

しかし、その思いまで率直に表現する事は出来ず、ちらりとアリシアを見やれば彼女は苦笑していた。どうやら同じ思いのようである。

「……鬱陶しいわね」

突然の言葉にびくりと肩を揺らしてフィオルに視線を送れば、彼女は不服そうに眉を寄せてこちらを見ていた。何か怒らせてしまっただろうか、と玲音はますます俯いてしまう。

フィオルから向けられる視線が怖い、と玲音は思った。こちらを観察するような、見定めようとする視線。もしもここで彼女の不興を買えば、この世界でも人の悪意に晒されるのだろうか。それは、嫌だ。だからといって、玲音には目の前の少女に好意を持たれるような接し方も分からなければ、ロクに口を開く事さえ出来ない。

玲音は他人からの関心を極度に嫌う。悪意を持たれるくらいなら誰にも存在に気付かれなくて良い、彼女はそう思ってこれまでを生きてきた。

「髪ね。そうね、髪だわ。髪がいけないのね」

独り言のように呟いたフィオルは自身の考えに納得がいったのか、その表情に満足そうな笑顔を取り戻す。

玲音といえば、彼女の発した『髪』という単語にますます怯えの色を濃くした。それは、元の世界で他人に悪意を持たれるきっかけとなっていた部位である。母との事が無ければ、玲音はさっさと黒く

染めてしまっていただろう。

日本とは違い、色んな色彩の人が見られるこの世界では玲音の髪もさして目立たないと思っていたが、やはりこの髪は悪い意味で人の視線を集めてしまうのか。

どこかすっきりとした表情のフィオルは一つ頷くと、ドレスのスカートをまくり上げる。

「フィ、フィオル様!?何を…」

はしたない行動に咎めるような声を上げるアリシアを無視し、フィオルは自身のスカートの中に手を差し入れるとその中から『ある』物を取り出した。それは、一本の短剣だった。

玲音が息を呑む暇も、怯え後ずさる暇もなく、フィオルは実に機嫌の良い調子で短剣を片手に玲音へと距離を詰め、彼女の顔を隠す長い前髪に手を伸ばし――――――――――手にした短剣で玲音の前髪をばっさりと切った。

「え……?」

切られた髪がはらり、と宙を舞う。頬にまでかかっていた玲音の前髪は眉よりも短くなり、かつてないほどに彼女の顔が外気に晒されていた。

「ちょっと切り過ぎちゃったかしら」

乱暴といえる行いをした張本人であるフィオルは、なんて事ないようにそう言ってのけて、わし掴んでいた玲音の前髪だったモノたちを床に払った。その凶行にまるで悪びれた様子もなく、彼女は露わになった玲音の顔をどこか楽しそうに眺めている。

玲音の背後に控え、止める間もなく見ているしか出来なかったアリシアは、口元を手で押さえながら顔を青ざめさせ、言葉を失っていた。

玲音はなかなか状況を理解する事が出来ず、いきなり開けた視界に戸惑いながら前髪に手を伸ばし、いつもなら触れる場所に前髪がない事を察し、床に散らばる自身の髪だったものを確認する。
そして、ようやく状況を理解出来たとき、今まで出した事もない大きな悲鳴を上げたのだった。

姫君の横暴（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

王子の叱責（前書き）

いつもより長いです。
一つのシーンなので切らない方が良いかな、と一話分として投稿しました。
切るのと切らないの、どちらの方が読みやすいのでしょうか…。

王子の叱責

髪が、
髪が……
現状を理解できず混乱したレイネは、その言葉だけが頭を巡っていた。

髪を切られた。誰に？目の前の少女に。何故？分からない、突然の事だった。
悲鳴を上げたレイネは瞳一杯に涙を浮かべ、その場に座り込んだ。
頭を抱えるその腕は怯えから震えていた。

こんな仕打ちを受けなければならないほど、この短時間でフィオルに嫌われてしまったのだろうか。そう思うが、思い返して見ても勝気な彼女の顔には悪意といったものは感じられなかった。ただ、常に余裕があり、何をするか分からないどこか楽しそうなその表情は、悪意より余程性質が悪いように思えた。

「何があった！？」

誰かに呼ばれたのか、悲鳴を聞きつけたのか。鋭い声を出すウェスペルが勢いよく室内に飛び込んできた。どこか焦ったようなその声音を、こんな状況でなければレイネは意外に思ったかもしれない。
室内をぐるりと見渡したウェスペルは、座り込むレイネとその周囲に散らばる彼女の髪だったモノ、青ざめたアリシア、短剣を片手に満足そうな笑みを見せるフィオルを確認してある程度の状況を察したのだろう。大きな溜息をつくと室内を窺っていた侍従達を閉めだ

し、途端に眉を怒らせた。

「フィオル！」

「何でしょうか、お兄様。怖いお声を出さないでくださいます？」

「ふざけるな。彼女に傷一つでも付けてみろ。彼女は『鍵守』で陛下の賓客だ。いくらおまえでも、それ相応の対処をしなければならなくなる」

「まあ！傷なんてとんでもありませんわ」

低い声を出すウェスペルにもまるで堪えた様子はなく、フィオルは大袈裟に驚きを示し、見惚れるほど可憐な笑顔を浮かべてみせた。

「わたくしはただ、前が見えにくいでしょうと思って、レイネ様の前髪を切って差し上げただけですわ」

「それが問題だと言っているんだ！」

怒鳴りつけるウェスペルに、怖いお兄様、とフィオルは口元を隠してくすくす笑う。彼の怒りをひらりとかわす彼女には全く反省の色は見えず、ウェスペルは一度大きく息を吐きだして、気持ちを落ち着ける。

「大体、何故おまえがそんな物を…」

「短剣の事ですか？自衛の為に、ルーカスに手配させましたの」

「……あいつか」

知っている人物なのか、ウェスペルは眉を顰め、とにかくこれは預かる、と言ってフィオルの手から短剣を取り上げた。酷いですわ！と非難を飛ばす彼女をウェスペルがあしらっていれば、冷静さを取り戻したアリシアがレイネに駆け寄る。

「レイネ様？レイネ様、大丈夫ですか？」
「あ、あぁ……ふ、ぅ」

座り込むレイネをアリシアが抱き起こそうとすれば、レイネは縋るように彼女のエプロンを握り締め、俯いたまま首を横に振る。心配するアリシアの声に応える事はなく、レイネは堪えられなくなって声を上げた。

「もう、嫌！何で、私が何か悪い事をした！？どうして私がこんな目に遭うの？放っておいてよ！鍵守なんて、勝手な事ばかり言わないで！一方的に押し付けて…っもう、家に帰りたい。家に帰して！こんな所は嫌い！大嫌い！」

この世界に来てから感じていた不満が一気に爆発した。フィオルの行動で乱された心が、制御できずに溢れ返る。見ず知らずの世界、与えられる恐怖と緊張、全て預かり知らぬ所で決められる自身の処遇。今まで憶病さから逆らえなかった全てに対し、怒りと憎しみにも似た感情が湧き上がる。

頭では分かっていた。今の状況がレイネにとって最良である事は。こうしてウェスペルに保護され、王宮に一室をしつらえてもらうなど、過ぎた待遇だ。彼に出会わなければ、レイネは異世界に放りだされ、抗う暇もなく死んでいたかもしれない。レイネには与えられた環境に依存する以外、生きる術はない。それは元の世界でも同じだった。平和なあの世界では、誰もがそうして生きている。それが幸福か不幸か悩みながら。

レイネは人の視線に対する恐怖も忘れて、ただ暴走する心のまま嘆いた。なだめるように抱きしめるアリシアに縋りつきながら、視線の先にいるウェスペルを睨みつける。彼はこの世界で初めて出会っ

た人物で、ここに連れて来てレイネの生活を管理している張本人だ。初対面の印象からずっと怯えながら接して来たが、今は全ての憤りを彼に感じる。恨みとは恐怖さえ超越するのだと、レイネは初めて知った。

「私は鍵守なんて知らない。帰りたい、帰りたいよ……」

涙が止め処なく溢れて来る。レイネは元いたあの世界を、けして好きではなかった。レイネにとって、あの世界は冷たく厳しい世界だった。それでも、途方もない程遠い場所に来てしまった今、あの世界を恋しく思った。冷たくて、孤独でも良いから、良く知る世界に帰りたかった。あの世界には、あの家には、母が帰ってくるのだから。

アリシアがレイネの背中をさすってくれる。その手はどこまでも優しくて、温かいのに、それを手離しても元の世界に帰りたい。そう思うと、その温もりが辛くて、レイネは泣きながら頭を横に振った。

「……確かに、あなたに不自由を強いる事は、申し訳無いと思っている」

泣きわめくレイネに睨まれても微動しなかったウェスペルが、静かに口を開いた。それはフィオルを叱りつけていた怒鳴るようなものではなく、よく聞いた夜の闇のように無感動なものだったのに、レイネは何故かびくりと肩を震わせる。

どこまでも冷たい、深い森のように静謐な瞳が、睨むでもなくレイネを射抜いた。

「だが、それは今の話とは関係ない。あなたが今怒るべきなのは凶行を働いたフィオルに対してで、そんな風に喚いた所で駄々をこね

る子どもだ。不満や要求は使い所を弁え、使い方に注意しなければ誰にも本当の意味では届かない」

「ウェスペル様っ！」

容赦の無い彼の言葉に、アリシアが非難するように声を上げたが、ウェスペルはそれを無視して単調に言葉を続けた。

「あなたが故郷に帰れるように、我が国は協力を惜しまない。この国に滞在される限り、その生活の一切を保障しよう。それも含め、何か要求があればまた改めて伺う。今のあなたでは冷静な会話は望めないだろう。遅くなったが、妹の非礼を詫びさせてもらいたい。すまなかった」

ウェスペルは真っ直ぐにレイネを見据え、謝罪を告げる。

レイネが彼のやはり一方的な発言に怒りを、厳し過ぎる正論に悔しさを、座り込む自身を見下ろす瞳に恐れを抱いたが、彼女が何らかの反応をするよりも早く、ウェスペルは身を翻し、部屋を後にした。中を窺っていたらしい侍従達は、彼が扉を開けると慌てて離れていったが、何か指示を出されて散り散りになっていく。大理石の廊下を叩くウェスペルのブーツの音が聞こえなくなった所で、どこか呆れ交じりにフィオルが口を開いた。

「お兄様らしいわ」

フィオルはくるりとドレスの裾を翻して、レイネに向き直るとやはり堂々とした微笑みを浮かべる。その表情は、泣きだしたレイネにも、短剣を取り上げて叱ったウェスペルにもまるで堪えていないのだという事が、よく窺い知れた。

「お兄様の言葉は気にする事無いわ。お兄様は誰に対してもああな

んだから。厳しくて、筋の通らない事が嫌いなの。面倒ったら無いわね！」

フィオルは可笑しそうに声を立てて笑う。しかし、すぐにその笑いも収めると、どこか挑戦的に唇をつり上げて落ち着いた声音で玲音に告げた。

「わたくしは、謝らないわ。だって、人と向き合っているのに目も合わそうとしない貴女が悪いのよ」

それはとても失礼な事ではなくて？そう、静かに口にするフィオルの表情は、瞳は、その造作も色合いもまるで違うのに、ウェスペルによく似ていると、レイネは思った。

「あんな髪じゃ暗くなってしまうのも当然だわ。せっかく切って差し上げたんだから、これからはちゃんと顔を上げなさいね」

フィオルはスカートの裾を持ち上げると、御機嫌よう、と淑女然とした礼をとって退室していった。レイネはウェスペルのときと同様、何も言葉を返せないまま、彼女を見送るしか出来ない。

「レイネ様？レイネ様、立てますか？」

気遣わしげに名を呼ぶアリシアに迷惑を掛けている事は分かっているのに、レイネは何も言えないまま俯いた。顔を上げられなかった。頭の中をウェスペルとフィオルの言葉がぐるぐると回る。二人の言葉の意味が分からなくて、その厳しさに身を裂かれそうで、レイネは顔を上げられないまま泣いた。どれだけ泣いても、どれだけ嘆いても、彼女がいるのはこの右も左も分からない世界だった。

王子の叱責（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

結果として、玲音はフィオルの行動を咎められなくなってしまった。
それは、彼女の言葉の正しさを実感してしまったからだ。

フィオルに前髪を切られて、玲音の前髪は眉の上くらいの長さになった。自然と彼女の顔は曝け出される事になり、そうなると目を逸らす行為も明らかになって、その失礼さを理解した玲音は顔を上げるようになる。フィオルの行動が荒療治となったのだ。
もちろん、すぐに誰に対してもにこやかに目を合わせられるようになる訳ではない。玲音は玲音なりのペースで、身近な人達から少しずつ慣れようとしている。

すると、今まで見えなかった色んな事が見えて来た。
例えば、アリシアはただ親切なだけではなく、いつだって玲音の事を慈しみに満ちた瞳で見ている事に気付いた。玲音の心情を思いやって、労わり、心を砕いて接してくれていた。
どうしてこの人にまで怯えなければいけなかったのだろう、とそれに気付けば不思議に思ってしまうくらい、いつだってアリシアは玲音に優しい。

「レイネったらまだ文字も書けないの？仕方ないわね、わたくしが教えて差し上げても良いわ」

仕方ないという言葉とは裏腹に、どこか浮足立った様子で言うのはフィオルだ。
玲音は彼女に対する認識も早々に改めた。フィオルは生来の性格か

らか明け透けに物を言い、少々高圧的なところはあるが、彼女が玲音に向けるものはけして悪意などではない。
良いと思えば良いと言い、悪いと思えば悪いと言い、嫌だと思えばきっぱりと拒絶し、惹かれたものには素直に手を伸ばす。良くも悪くも正直者であるフィオルは、『王女様』という立場を除けば、どこにでもいる好奇心旺盛な少女だった。

フィオルは初対面の日以来、年上の割に頼りない玲音の世話を焼いたり構ったりする事に楽しさを見出したようで、こうして度々玲音の元を訪ねて来る。相変わらず、侍従達を追い払ってしまうので、彼女付きの侍女達は疲れた溜息をついていた。

お姉さんを気取ったようなフィオルと、戸惑いながらも少しずつ顔を上げていく玲音を、アリシアが微笑ましそうに見守るのが彼女達の日常風景となっていた。

「あ、ありがとうございます、フィオル様」
「敬称も固い言葉もいらないと言っているでしょう。これではレイネを呼び捨てにして、砕けて話す私が礼儀知らずみたいじゃない」
「えっと、あの、ありがとう…フィオル？」

おずおずと玲音が言い直せば、拗ねたように唇を尖らせていたフィオルは一転、花のような笑顔を見せた。思わず見惚れてしまうほどに、そんな彼女は輝いている。
そこへ、外から運ばれて来たお茶のセットを受け取っていたアリシアが、扉のそばからワゴンを押して二人の下へと戻ってくる。お茶の支度をしながら、彼女は温かく微笑んだ。

「随分と親しくなられた様子で、安心致しました。始めはどうなる事かと思いましたが…」

「アリシアは心配性ね」

苦笑するアリシアに、フィオルは平然と答える。相変わらず、彼女は自分の行為に全く悪びれた様子は無い。

フィオルは、アリシアに対しては王女然とした様子ではなく、親しい者に接するように砕けた一面を見せていた。

玲音も全てを把握している訳ではないが、どうも二人から聞いた話によると、王族であるフィオルは当然の事、国賓として扱われている玲音もアリシアにとっては主人であり、仕えるべき相手であるらしい。

従者であるアリシアが主人である二人の会話に口を挟む事も、本来なら礼儀知らずで不敬な行いであるそうだが、そんな事が分からない玲音はもちろん、フィオルもそれを咎める事はしなかった。

フィオル曰く、アリシアの父は国王の信頼が篤く、それとは別にいくつかの理由からフィオルもアリシアのそんな態度を許し、また望んでいるのだという。

といっても、他者の目がある所や公的な場では、もちろんアリシアは完璧な侍従として粛々と控えているのだが。

玲音は何も知らないながらにその話を聞いて、助かったと思った。

おそらく、アリシアが今のように親しく、時には姉のように接してくれていなければ、これほど早く彼女に気を許す事もなく、この世界での生活もこれ以上に不安で寂しいものになっていただろう。

玲音の生活も精神も、その大半をアリシアによって支えられていた。

彼女達のティータイム（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

ドレスの日く

「レイネ様、せっかく仲良くなられたのですから、新しいドレスをフィオル様にも見ていただいてはいかがですか？」
「レイネのドレスを仕立てたの？良いわ、わたくしが品評してあげる」
「もう、フィオル様ったら。それではレイネ様が委縮されてしまいますわ」
弾む二人の会話に、玲音は何の事か分からずに首を傾げた。
「あの、私のドレスと言うのは…？」
すると、和やかな空気から一転、アリシアは実は、と少々言いにくそうに彼女の疑問に答える。
「これまでレイネ様がお召しになっていたドレスは、全て既製品なんです」
「それが何か？」
「何かって、レイネは国賓としての扱いを受けているのよ？そんなあなたに安っぽいドレスを着せるなんて王家の名折れだわ」
フィオルはまるで嘆くように肩を竦めて見せたが、玲音にとっては今着ているドレスでも十分気後れするほど贅沢である。むしろ、これ以上豪奢なものがでてきたらどうしよう、と思ったほどだ。
そう言われてみれば、玲音はこの世界に来た二日目に全身を採寸された事を思い出す。

ちなみに、今日のフィオルはラベンダー色のドレスを纏っている。その瞳と同系色で柔らかなシフォンが広がるデザインは彼女にあつらえたかのようによく似合っており、事実彼女の為だけの一着なのだろう。

「遅ればせながら、ようやくレイネ様に贈られるドレスが整いました。もし、お好みでなければ遠慮なくおっしゃってくださいね。すぐに新しいものを手配していただきますので」

「と、とんでもないです！服を用意してもらえるだけでも有難いのに……」

好みがどうなどというわがままが言える立場ではない、と玲音は慌てて首を横に振る。すると、フィオルがあら？と疑問の声を上げた。

「そう言えば、お父様に謁見する際のドレスはどうしたの？侍女たちの話では『鍵守様』に相応しい、とても上等で品の良い緑のドレスを纏っていたらしいけれど。そんなドレスが、安物のはずが無いわよね？」

「それは、あの…」

アリシアは珍しく言い淀んで玲音の様子を窺うと、少し困ったように、申し訳なさそうに口を開いた。

「イベリス様の物をお借り致しました」

「……なるほどね。そうよね、おかしいと思ったの。今この城に住む女性は私と正妃様だけ。私のものではレイネに差し上げようにもサイズが合わないし、正妃様がお兄様に協力なさるはずないものね」

フィオルはいつもとは違うどこか寂しげな微笑みを浮かべ、含みの

ある言い方をしたが、玲音がそれを疑問に思うよりも早く、彼女はくるりといつもの笑顔に戻ると話を変える。その為に玲音は感じた違和感をすぐに忘れてしまった。

「イベリス様というのはウェスペルお兄様のお母様の事よ」
「ウェスペル様の……？」
「と言っても、すでに亡くなられているから例のドレスは遺品という事になるわ」

玲音はウェスペルの名に二人に分からないように身を震わせたが、続けられたフィオルの言葉に目を瞠る。ウェスペルの母の話にも驚いたが、知らずその遺品を借りていた事に、更なる戸惑いを覚えた。

「お気を悪くされましたか？」

アリシアは気遣わしげな視線を玲音に向けると、一歩下がって頭を下げた。

「国によっては、死者の物を厭う地もあると聞きます。けれど、火急な事であり、ウェスペル様にはそうする他、仕様が無かったのです。気分を害されたのであれば、その責は私に負わせて下さいませ。一侍従である私に負える責任など高が知れている事は承知しておりますが、それでもどうか、咎は私だけにとどめてくださいませんか？」
「か、顔を上げて下さい！」

玲音は慌てて立ち上がって、アリシアの懸念を否定する。

「咎なんてとんでもないです！むしろ、そんな大切なものをお借りしていたなんて、私にはもったいなくて、申し訳ないです」

玲音はあのドレスを着たときのウェスペルの顔を思い出す。彼は初対面からずっと、変わらず冷淡な無表情だった。しかし、もしかしたら、あの冷静な表情の裏では何か思う所があったのかもしれない。玲音も父を亡くしている。きっと玲音なら、素性も知れない他人が父の遺品を使っているのを見れば、在りし日を思い出して複雑な心境になったはずだ。

「お礼を、言おうと思います。まだちゃんと伝えていなかったので」

玲音はぎこちなく笑顔を浮かべた。人とこんなに会話をするのも久しぶりで、いつしか不安な表情以外を浮かべる事さえ苦手になっていたけれど、罰を受ける覚悟さえ表したアリシアに安心してもらう為なら、と慣れない表情を形作る。

その気持ちが伝わったのか、アリシアはまた深々と頭を下げると安堵したような微笑を浮かべた。

「ありがとうございます」

「アリシアはずるいわ。こんな気の小さい子が咎なんて口に出来るはずがないのにね」

「フィ、フィオル様っ」

すると、フィオルは間髪入れずにからかうようにそう口にした。アリシアが焦った様子を見せたが、玲音自身はあまりに的確に言い当てられた人間像にぐっと息を呑む。ここで反論出来ない辺りが、フィオルの言うような人間であるという証左だ。

本音を言ってしまえば、玲音はウェスペルに礼を伝えると言ったが、そんな勇気はまるで湧いてきそうになかった。ただ、アリシアに顔を上げて欲しくて口にしたのだ。

謝意が無い訳ではない。母の形見を借りたというならば本心から申し訳ない気持ちと、有難い気持ちが湧いてくる。けれど玲音は、今もウェスペルの事が恐ろしかった。
アリシアやフィオルに対しては随分と慣れ、少しだけ顔を上げられるようにもなり、どもりながらも会話が出来るようになった。それでもウェスペルだけは、未だ慣れる気がしない。

彼は日に何度か玲音の部屋に顔を出す。生活に関する伝達や、玲音に不便が無いか、何か希望が無いかだけを淡々と尋ねては去っていく。ウェスペルから悪意を感じる訳ではない。初対面で剣を向けられた事に関しても丁重な謝罪を受け、害成そうという気はないとも釈明された。

それでも彼からその瞳を向けられると、玲音は身が竦むような思いをする。その深い森のような冷たい瞳に映されると、怯えと不安から居ても立ってもいられなくなる。その癖、全身が凍りついたように上手く動かなくなるのだ。
玲音はウェスペルといて感じる不安や心細さの原因が分からず、今もずっと恐ろしさだけを募らせていた。

ドレスの曰く（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

記憶の森

玲音はまだ母がそばにいて、父も健在だった頃に家族でキャンプに出掛けた事がある。
川のそばにテントを張っていたのだが、玲音は両親の目を盗んで近くの森に迷い込んでしまった。
気付けば彼女の回りを一面の木々が取り囲み、幼い玲音は薄暗い森の中で足が竦んで動けなくなった。恐怖のあまり神経が研ぎ澄まされ、些細な木々のさざめきや自身の心臓の音さえ不気味に聞こえ、泣き声を上げる事さえ出来なかった。声を上げれば、目に見えない何かに見付かってしまうような気がしたのだ。恐ろしい何かに。
玲音が恐れたそんな森に、ウェスペルは似ている。

「何か必要なものはあるか？」

部屋を訪れたウェスペルはいくつかの伝達の後、玲音にそう問いかけた。向かいに立つ玲音は顔を上げられずに俯いたままで、冷や汗を流す。怯えから過剰に反応しそうになる体を、必死に宥めていた。
色素の薄い者が多いこの世界では珍しい宵闇色の髪は、玲音の目から見て異様な程の存在感を醸し、深い森の色をした瞳には全てを見透かされているような気にさせられ、表情を浮かべない面立ちからは一切の感情を感じられなかった。
玲音はその姿を視界に収める事も、彼の瞳に映される事もどちらも恐ろしくて、俯いたまま首を横に振る。

「…す、い、ません。ありません…」
「何故謝る」
「……すい、ません」

謝罪の言葉を繰り返す玲音に、ウェスペルは沈黙した。しばらく何の表情も浮かべないまま俯く彼女の旋毛を見詰めると、静かに踵を返す。

「何かあれば、アリシアを通しても良い。すぐに言いなさい。私はこれで失礼する」

そして、ウェスペルは名残を残さずに退室していく。王子であるらしいが、フィオルと違って一人の侍従も付けていない彼は、入室も退室も静かなものだ。

玲音は閉められた扉を確認して、安堵から大きな息を吐き出した。緊張の為に息が詰まり、まともに呼吸する事も出来ていなかったのだ。
お礼を言わなければ、と思っている。ウェスペルに謝意を伝える為でもあり、色々と気を揉んでくれているアリシアに安心してもらう為にも、玲音はそれを伝える意思を口にした。

けれど、やはりダメだった。玲音はウェスペルと言葉を交わすどころか、正面に立つだけで足が竦み、血の気が引く。玲音の心は畏縮し、言わなければいけない言葉も、謝意さえも頭から吹き飛んでしまうのだ。
人と話すときに目を背ける事がどれだけ失礼かも、もう分かっているはずなのに。玲音は怯える自分を隠す事も出来ず、晒されている顔であからさまに視線を避ける。

ウェスペルは呆れているだろうか、それとも怒っているのか。
そう考え、また怯えを感じる自身のあまりの意気地の無さに、玲音は自己嫌悪に陥った。

「レイネったら、またお兄様を困らせたのね」

そろそろお茶にしましょうか、とアリシアと共にその準備をしていたところで、タイミング良くフィオルが現われた。彼女はすっかり玲音の生活サイクルを把握しているようで、こうした事は度々あった。

「あら。またアリシアのお手伝いをしていたの？侍女の仕事を取るものではないわ」

カップを手にする玲音を見てフィオルはそう言ったが、彼女も本気で止める気はないようで、楽しそうにくすくすと笑う。
フィオルの言う通り、始めの頃はアリシアにも全てを任せるように言われていたのだが、極々普通の庶民である玲音は他人が働いているのにそれを黙って見ているだけ、というのはどうしても落ち着かない。その気持ちを何とか伝えればアリシアも納得してくれたらしく、二人きりのときに限り、玲音が彼女の手伝いをする事を許してくれた。

ちなみに、侍女として常に玲音のそばに付いているのはアリシアだけだが、部屋の掃除などアリシア一人で手が回らない事に関しては、玲音が別室にいる間に他の人達がこなしてくれているらしい。いくら広いとはいえ、自分の部屋の掃除くらいは自分でするというのが玲音にとっての常識なので、それを聞くと非常に申し訳ない気持ちになったものだ。

フィオル曰く、玲音にはもっと多くの侍女を付けてもおかしくないらしい。玲音は一応国賓であり、本来ならそうやって何人かの侍女で仕事を分担するらしいが、それを聞いた玲音は慌てて首を横に振った。

ただでさえこんな恭しい扱いには慣れないのに、常にそんなに多くの人が回りにいては気が休まるときがない。何より、玲音はそんな扱いを受けるような身分ではない。分不相応な扱いは、居心地を悪くするだけだ。

「レイネ様はお優しい方ですから、私が甘えてしまったのです。それより、ウェスペル様がどうかされたのですか？」

アリシアは自身の甘えと揶揄する事で、貴人らしくない玲音の行動をやんわりと庇う。そんなさり気ない所が、アリシアは大人だった。玲音はアリシアにカップを受け渡すと、フィオルと共に部屋の中央に位置する応接用の席に着く。例え相手がフィオルでも、来客があれば全てをアリシアに任せるのが二人で決めたルールだった。

フィオルはアリシアの言葉に思い出したように声を上げる。

「そうそう。ウェスペルお兄様がいたくお困りだと聞いたのよ。あからさまに怯えきったレイネの態度にね」

それにしても、とフィオルはアリシアへ視線を流す。

「わたくしはどちらの兄かは言っていないつもりだけれど？」

「レイネ様に関する事はウェスペル様に一任されたと伺いました。ご容赦くださいませ」

アリシアは珍しく苦笑のような表情を浮かべる。眉尻を下げた表情は、いつも穏やかに微笑む彼女と比べると心細くさえ見えた。フィオルとの会話の中で、アリシアはたまにそんな表情を見せる。

玲音はアリシアの様子に疑問を抱きながらも、恐る恐るフィオルに問いかけた。

「あの、ウェスペル様が何か言っていたの？」

「お兄様は何もおっしゃらないわ。ただ、わたくしにもそれなりの情報網というものがあるのよ」

得意げに胸を張るフィオルとは対照的に、玲音はますます猫背がちになって俯いてしまう。分かり切っていた事だが、改めて自身はウェスペルを困らせているのだと自覚すると、記憶の中にある彼の緑の瞳がますます冷え切って感じられ、余計にウェスペルへの恐れが増し、同時に悲しくもなる。

玲音は自身が人から好かれるような態度を取れていないと自覚していても、それでも嫌われる事を恐れる人間だった。そんな憶病な自分が、玲音自身嫌いで仕方なかった。

「レイネは相変わらずお兄様が恐ろしいのね」

アリシアの手によって、ワゴンの上からテーブルの上にティーセットと茶菓子が並べられる。異世界という事で、食べ物に関しても玲音の知らない物が多くあったが、中には元の世界の食べ物によく似

ているものもあり、この茶菓子はマドレーヌに似ていた。

記憶の森（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

指摘と自覚

フィオルはソーサーから紅茶の入ったカップを持ち上げ、それを口元に運びながら淡々と口にした。

「確かに、お世辞にも社交的とは言えないけれど、王命とはいえ貴女の生活の便宜を図ってくれている人よ？この場合はむしろ、最も頼りにしなければいけない人ではなくて？」

フィオルの言葉に、玲音は黙り込んでしまう。自分でも理由が分からなかった。始めは剣を向けられた事により生命の危機意識が働いた。だから、同じく見知らぬ世界では命に関わる事になる、自身の置かれた状況を知る為ならば、少しの勇気を振り絞って問いかける事が出来た。彼が初対面で剣を向けたのは、自己防衛を図っただけで今はもう玲音に剣を向ける気も、その必要がない事も理解している。

では、それでも未だ湧き上がるこの恐怖心は何だろう。

ウェスペルの視線に晒されると、否が応でも体が緊張し、心細くて不安な気持ちになり、それが恐怖となって玲音の心にのし掛かる。玲音は目の前に置かれた白磁のティーカップを口に運ばず、ただじっと見つめた。繊細な造りのそれは、鍵とスズランのような花が絡まるように描かれている。この地では鍵守伝説により、鍵のモチーフが好まれるらしい。

フィオルは考えるように視線を紅茶に落とし、何かを思いついたようにまたすぐに顔を上げ、彼女らしいにっこりとした笑顔を浮かべ

る。フィオルらしい、とはつまり少々『悪戯っぽい』それだった。

「あくまでわたくしの予想だけれど、それで良ければレイネがお兄様を恐れる理由を教えて差し上げようかしら？」

玲音はびくりと大袈裟に肩を揺らす。フィオルの表情から何だか嫌な予感がした。良くも悪くも正直なフィオルは度々玲音の胸に刺さるような発言をするのだが、その笑みはそうした発言をするときのものだった。不安に駆られてちらりとアリシアを見やれば、彼女もそれを感じ取ったのか、微笑みが曖昧なものになっていた。かくして、カップをソーサーに置いたフィオルはやはり、躊躇いもなく玲音へ厳しい一言を向ける。

「貴女が甘ったれだからじゃないかしら」

花のような笑顔とは裏腹に、フィオルは欠片の遠慮もなく言葉を続けた。

「レイネは気が小さいでしょう？それってわたくしは損だと思うけれど、貴女はそれに甘えているわ。気が小さいから人と向き合えないのも、自分の意見を言えないのも仕方がないと思っていない？レイネは気の小ささを言い訳にして、それらを改善しようと少しでも自身で努力しているかしら？」

フィオルの言葉に玲音は図星を突かれた、と感じた。自覚があった訳ではない。ただ、彼女の言葉が真実であると胸中を襲う気持ちの悪さに理解させられた。

玲音は初めてあったときのフィオルに感じた恐れを思い出す。自信に満ち溢れた彼女の性格に恐れを抱いたのは確かだが、あのときの

玲音は全てを見透かす聡明さを感じてそれを恐れていたのだと、今になって気付いた。彼女の聡明さは、こんな風に容易く玲音の本質を暴いてしまうだろうから。
それはきっと、ウェスペルに対しても同じ事で。

「努力していないから自信を持てず、自信が無いから気が小さいのでしょう？お兄様はとても厳格な人で、その分自負をお持ちだわ。ご自分にも他人にも甘えを許さない気性は面倒なところだけれど、だからこそ甘ったれな人はお兄様の近くではその甘さを浮き彫りにされる。それってとても、惨めよね。だから恐れるのではないかしら？誰しも、幼さや弱さを自覚させられるのはとてもとても、嫌なものだもの」

そう言ったフィオルの表情に、一瞬自嘲の笑みが浮かんだが、すぐにいつもの笑顔によって掻き消されてしまった。その負の表情は、いつも決まって浮かべている可憐な笑顔とは違う年相応な弱さが浮かんでいたが、フィオルはそれを巧妙に隠してしまい、彼女の言葉に頭を巡らせていた玲音はそれに気付かない。アリシアだけがただ、二人の少女を労わるように見つめていた。

「だからレイネはもう少しだけ努力して、自信を持ちなさいね」

そうすればお兄様とも少しは普通に話せるんじゃないかしら、とフィオルは話を締めくくった。
玲音はフィオルの言葉の正しさを身の内から感じていたが、それに気付いてしまうとますます自身の弱さに哀しくなった。

玲音は気の小ささから勝手に他人を悪者にして、甘えたな自分を守っていなのかもしれない。相手は怖い人だから歩み寄る必要はないと、それは危険な事だ、と。

それはただ、人と向き合う事から、人と向き合えない自分から逃げていただけではないか。
玲音はそんな自分の醜さを深く恥じた。誰かから指摘されないとそれに気付く事も出来ない自分がまた、恥ずかしかった。

俯いたままの玲音を横目で見るフィオルが再び紅茶を口に運び、そばに控えるアリシアが玲音に手を伸ばそうとしたとき、静寂に包まれていた室内にノックの音が響いた。
ノックは二度三度と繰り返され、室内の静寂を壊す。それでもフィオルだけは平然としていたが、玲音はびくりと肩を震わせる。

「レイネ様…」

アリシアが案じながらも玲音に呼び掛ける。そっとしておいてあげたかったが、この部屋の主は玲音であり、来客が来たとなれば応じるかどうかの判断を仰ぎ、アリシアはその対処をしなければならなかった。

「……大丈夫、です。待たせると失礼だから…」

震えている弱弱しい玲音の声に不安を覚えたが、アリシアは彼女の言葉に従い素早く扉へ向かう。お待たせ致しました、とアリシアが扉を開けば、その向こうにいたのはウェスペルだった。
玲音は怯えの代わりに、恥じ入る気持ちや勝手に彼を悪者のように感じていた罪悪感で、すぐにまた俯いてしまう。アリシアが用件を尋ねれば、ウェスペルは言葉少なに告げた。

「皇太子殿下がお呼びだ」

指摘と自覚（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

政治家の思考

フィオルとは部屋で別れ、城内の廊下をウェスペルに伴われて歩く。向かう先は玲音の部屋がある客室など、居住区である西棟の一画から中央棟を通り抜けた東棟の奥の間にあるらしい。中央棟には広間があり、晩餐会などがあればここで催される。そして、中央棟から北に階段を登れば、そこは政を司る中心部で会議室や資料室、果ては国王の執務室までである。

ついでだと言って、ウェスペルは東棟へ向かう道すがら玲音に案内をしていた。

太陽の光が差し込む白亜の廊下はとても美しく、神秘的な雰囲気を醸しているのだが、誰かとすれ違う度に深々と頭を下げて見送られるので、玲音は戦々恐々としていた。

先程のフィオルとの会話や、それによって生じた自身に対する気持ちはけして忘れられるものではないが、それを一旦頭の隅に追いやってしまうほど、人々から頭を下げられる事に玲音は非常に肩身の狭い思いをしていた。

彼女の支えは少し離れて後ろから付いてきてくれているアリシアの存在だけである。

ただし、頼みの綱であるアリシアも、他人の目に触れるこの場では侍女として主人の会話に口を出すなど出来るはずもなく、ウェスペルに何か声を掛けられたとしても、玲音は一人で受け答えしなければならない。

「ウェスペル様――――――――？」

吹き抜けになっている中央棟の広間を抜けた所で、名を呼ばれたウェスペルが足を止める。玲音はつんのめりそうになりながら慌てて立ち止まった。

城へ訪れた貴族達も客人もまずはここを通り抜ける、と説明されたその広い場所を通り過ぎて、再び白亜の廊下を歩きだしたウェスペルの背に呼びかけたのは、黒褐色の髪に灰色の瞳を持つ、貴族と思われる身なりの良い壮年の男性だった。年は四十過ぎくらいだろうか、彫りの深い顔立ちに更に怪訝そうに眉間に皺を寄せていて、近寄りがたい雰囲気の人だ。玲音の身に一気に緊張が走る。

ウェスペルはそちらを振りかえり、相変わらず平坦な声で男性に応えた。

「ダーウィン卿、久しぶりだな」

「ご無沙汰しております。ウェスペル様におかれましては、本日もご機嫌麗しく存じ上げます」

恭しく頭を下げる男性にも、ウェスペルは変わらず堂々とした振る舞いでその礼を受け止めた。彼が臣下と接している所を初めて見た玲音は、ウェスペルがこの世界の王族であると改めて知る。そんな姿を見た事が無かったので『王子』と言われて頭で理解しても実感は伴っていなかったのだが、今の彼を見ると確かに生まれたときから人の上に立つ事を定められた存在である、とよく分かった。礼を尽くされる彼の振る舞いは、それほどに自然なものだった。

「今日はどうされた？」

「北方との外交に関する事で登城するようにとの連絡を受け、参った次第でございます」

「ああ、北は今揉めているらしいな」

「それも直に収まりましょう。カルディア王国はこの程度の問題を長引かせるほど、柔な国ではございません」

何やら政治に関する話をしているようだが、当然ながら玲音にはさっぱり分からなかった。居心地の悪い思いをしながらも大人しく二人の話が終わるのを待っていると、ふとウェスペルの纏う空気が変わったような気がして彼へと目を向ける。

「……そうだな。ダーウィン卿の手腕の噂は聞いている」

しかし、控え目に窺ってみても、彼の表情には何の変化も見られなかった。どうやら玲音の勘違いだったらしい。

「手腕など……私はただ、この国を想う一臣下として、精一杯の事をさせていただいているまでです」

「そなたの働きには兄上も期待していらっしゃる。しっかりと務められよ」

「もったいないお言葉にございます」

男性は再び頭を下げると、今度はウェスペルから玲音へと視線を向ける。玲音の体が反射的に強張った。

「ウェスペル様がこちらを歩かれているのは珍しいと思ったのですが、もしやそちらの方がお噂の鍵守様ですか？」

「ああ、紹介が遅くなったな」

そう言って、ウェスペルもまた玲音へ目を向ける。ついついアリシアに助けを求めようとしてしまい、俯いてしまいそうになる自分を必死で叱咤し、噂って何だろう、と嫌な予感がしつつも玲音は顎を引く程度で堪えていた。

先日、せめて初対面で自己紹介をするときくらいは俯くのを止めなさい、とフィオルに言われたばかりである。

「この方は鍵守であるレイネ殿だ。レイネ殿、こちらは我が国の外務卿であるアルベルト・ダーウィン卿だ」

アルベルト、と紹介された男性はウェスペルに対したときと同じように恭しく玲音に向けて頭を下げる。そろそろ、この国の世界の人にそういう扱いを受ける事に慣れても良い頃合いだが、生憎玲音は順応性が高いとは言えず、例え慣れたとしてもそれを受け入れられるかと言うと話は別だった。

「アルベルト・ダーウィンと申します。微力ながら、この国の外務に携わっている者です。貴女が伝説の鍵守様とは……お会いできて光栄にございます」

そうして、顔を上げたアルベルトの灰色の目が玲音を捉えた一瞬を、彼女はけして見逃さなかった。

玲音は他人を恐れるが故に、他人の視線に敏感だった。そんな彼女だからこそ分かる。今のアルベルトの目は、玲音から何かを探ろうとする目だった。その目には、言葉通り玲音との出会いを喜ぶ感情など欠片も見られない。

玲音は思わず一歩後ずさり、はっと我に返ってその場で一礼した。礼を失し、あからさまに怯えや疑惑を示してしまえば、相手の不興を買ってしまう事を玲音はよく知っている。

「あ、の…レイネ、サエハラです。よろしく、お願いします」

玲音は何とかそれだけ口にすると、素早く頭を下げた。出来るだけ

アルベルトから視線を外したいが為の行為だった。
アルベルトから悪意を感じる訳ではない。ただ、よく分からない。友好的な態度を装った彼が、一体何を探ろうとしたのか。分からない、というのは時に何よりも恐ろしい。

「お顔をお上げ下さい、鍵守様。私は貴女様が頭を下げるような人間ではありません」

アルベルトはわずかに苦みのある声で玲音に顔を上げるように促した。玲音は顎を引きがちになりながら、ゆっくりと顔を上げる。目線だけで見遣れば、アルベルトは現われたときのように眉間に皺の寄った厳しい表情をしていたが、その顔がどこかバツが悪そうなものに見えて玲音は困惑した。

その後、アルベルトは一礼するとすぐに去っていき、玲音らは再び皇太子が待っているという東棟に向かう。その途中で、玲音はウェスペルに窘められていた。

「身分の高い者は下の者に簡単に頭を下げてはいけない。以後気をつけなさい」

彼の斜め後ろを付いていく玲音は、怯えからすぐに頷いてしまいたかったが、どうしてもそれにだけは納得がいかなかった。玲音はけして身分の高い者ではなく、ただの一般人である。
返事も出来ない玲音をさして気にした風もなく、ウェスペルは話題を変えた。

「彼もまた政治家だ」

ウェスペルの言う『彼』がアルベルトの事であるとはすぐに分かっ

た。

「貴女を見て、その政治的価値を思考してしまうのも仕方がないと言えよう。あまり悪く思われるな」

ウェスペルもまた、アルベルトのあの視線に気付いていたようだった。自身に悪意がある訳ではなく、利用価値を探っていただけだというのならば玲音は安心出来た。もちろん、良い気はしないが、彼女が最も厭うのは他人に悪意を持たれる事である。安堵するにはそれで十分だった。

悪く思うな、と言ったウェスペルの表情が言葉とは裏腹に気難しげに歪んでいるのが、斜め後ろからでも分かった。その眉根を寄せる表情を見て、玲音はある事に気付く。

ウェスペルとアルベルトは似ている。

髪の色が少し近いくらいで、容姿に似通っている部分はないが、その厳しい表情がよく似ていた。

怒るなんて大それた気持ちは持てる訳もなかったが、アルベルトに対しても怯えずに接する事は難しそうだ、と玲音はこっそりと思ってしまった。

政治家の思考（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

皇太子殿下の好奇心

ウェスペルとフィオルの兄であるソレイユ皇太子について、玲音は事前にいくつかの情報を得ていた。
体が丈夫ではなく、公務もある程度はウェスペルに任せており、自室から出ずに療養している事が多いらしい。ただし、知識量に関してはカルディア王国の宰相さえ舌を巻くほどで、政務の方ではすでに国王の仕事の一部を任されている。年は二十一で趣味は読書との事だった。

「やあ、はじめまして、鍵守殿。僕はソレイユ。この国の第一王子をしている」

いかにも貴人の部屋であると察せられる護衛の立つ扉を抜け、奥の部屋にて玲音を出迎えたのは、大量の本が積み上げられたベッドの上で身を起こす、一人の青年だった。

琥珀色の肩につく髪は横で緩く結わえられ、穏やかに細められたその瞳はフィオルと同じ菫色だった。男性にしては線が細く、少々女性的な面差しをしている。
ウェスペルともフィオルとも、また違った優しげな雰囲気を纏っているが、その顔立ちに関してはウェスペルとはあまり似ていないが、フィオルとはよく似ていた。髪や瞳の色もそうだが、どことなく彼女の面影を感じられる。

「は…初めまして、あの、レイネ・サエハラと言います」
「レーネ？」

ソレイユは確認するように問い返す。どうやらこの世界の人にとっては『レイネ』という発音は難しいらしく、ウェスペルにしてもアリシアにしても伸ばすような発音に聞こえる。玲音は控え目に頷いて答えた。

玲音は枕元に塔のように積み上げられた本たちをちらりと盗み見る。その塔は一つや二つではなく、紗の天蓋のかかったベッドやそこに座する王子様とはひどくアンバランスな印象を受けた。

それ以外の、部屋の調度も、いかにも王子様然としたソレイユの容姿も雰囲気も、厳粛に控える侍従も、全てが完璧に整えられているからこそ、ベッドを占領するその本たちはより乱雑に感じられる。

もっとも、玲音は物語の中のような完璧さより、その乱雑さに人間味を感じて安心を覚えたのだが。

「わざわざ呼び立ててすまなかったね。本来なら僕の方が出向くのが礼儀だろうに、彼らには止められるし、ウェスペルには連れて来ると押し切られてしまったよ」

ソレイユは辺りを見回すと肩を竦める。彼のベッドのそばには侍従らしき男性が一人と、裾の長い文官の上衣を着た男性が控えていた。

「今朝方に熱があったとお聞きしました。兄上はこの国の次期国王陛下。皇太子殿下にご無理をさせる訳にはいきません」

「熱は昼までには下がったさ。何も走り回ると言っている訳ではないんだけどね」

ソレイユは柔和に微笑むと、その知的な瞳を玲音の後ろに向ける。目を細めて、背後に控えるアリシアへ声を掛けた。

「アリシアも、久しぶりだね」
「ご無沙汰しております、ソレイユ様」

アリシアはソレイユに対し、丁寧に礼を尽くす。普通、貴人は侍女に直接声を掛けるものではない、と聞いていたのだが、彼女はソレイユとも知り合いだったのだろうか。
よくよく考えてみればフィオルとも以前からの知り合いであり、彼女の父が国王の覚えもめでたいという事なので、その縁で彼らとは主従ではくくれない関係があるのかもしれない。
ソレイユはアリシアの礼を見とめると、すぐに玲音に視線を戻した。

「ああ、立たせたままだったね。座ってくれ。ベッドの上からで悪いが、貴女が元いた世界の話を聞かせて欲しいんだ」
「…私の、世界の？」

玲音はアリシアに椅子を引かれ、示されたベッドの向かいのその席に着く。侍従の男性はソレイユの指示でお茶の用意に退席していった。

「身体が不自由な分、好奇心ばかりが旺盛でね。何でも良いんだ。街並み、人柄、景色、政治形態から娯楽まで。僕は僕の知らない世界の話を聞かせてほしい」

ベッドの上で微笑むその人の顔は穏やかだったが、瞳は子どものような好奇心で輝いているように見えた。

皇太子殿下の好奇心（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

新たな一面

玲音の話に耳を傾けるソレイユの瞳は、好奇心に彩られていた。
そんな彼を玲音はフィオルとよく似ている、と思う。初めは容姿だけで性格はあまり似ていないように感じていたが、こうして話してみるとなるほど。好奇心旺盛な所がそっくりだった。

「王制ではないとすると、一体誰がその国を纏めるんだい？」
「えっと、総理大臣という役職の人です。この人も国民の投票によって選ばれた政治家の中から選出されます」
「なるほど、民主制とは興味深いね。その分問題も多かろうが、我が国にはない利点もまた、多くある」

つたない玲音の話の中で、ソレイユが特に関心を示したのは流石と言うべきか、政治に関する事だった。玲音は彼の期待に応えるべく、あやふやな知識と記憶を何とか引っ張り出しながらその質問に応えていた。

玲音にとって、不思議なくらいソレイユと話す事は苦では無かった。おそらく彼が話し上手であり、聞き上手でもある所が大きいのだろう。穏やかな口調で時折大袈裟な反応や冗談を交えるソレイユとの会話に、玲音の緊張も徐々に解けていった。男性との会話を楽しいと思った事など、これが初めてかもしれない。
ソレイユとの話に夢中になって随分時間が経った頃、所用があると言って退室していたウェスペルが戻って来た。彼は一度玲音に視線をやり、ソレイユに目を向けるとわずかに眉を寄せる。

「兄上、そろそろ休まれてはいかがですか？」
「ん？ああ、そういえば随分話しこんでいたね。楽しい話はついつい時間を忘れるよ」

ウェスペルの進言に、ソレイユは楽しそうに笑顔を浮かべてその体をベッドに横たえた。ゆっくりと息を吐き出すその姿は変わらず柔和だったが、どこか疲れを感じさせる。身体が弱いと聞いていたのに無理をさせてしまったのだろうか、と玲音は申し訳ない気持ちになった。
しかし、ソレイユはそんな玲音の懸念を否定するように、にっこりと穏やかに笑う。

「レイネ、今日はありがとう。君との会話が楽しくて、身体の不調も忘れてしまったよ。出来ればまた、君の話を聞かせて欲しい」
「あ、の…こんな話で良ければ、その…いくらでも」

玲音は意気込みそうになりながらソレイユの言葉に応える。玲音は人と関わる事も、会話をする事も苦手だった。だからこそ、こんなふうに『また』と二度目を求められる事は初めてで、どうしても嬉しくなってしまう。こんな私でも誰かを楽しくさせる事が出来るなんて、と。それは元の世界でも経験した事のない高揚感だった。
ウェスペルに促されて立ち上がると、ああそうそう、と閃いたようなソレイユの声に引き止められる。

「レイネ、良ければウェスペルとも仲良くしてやってほしい」
「……私の事は良いでしょう。そんな風に押し付けられては、レイネ殿もご迷惑です」
「そうかい？縁談を断ってばかりのウェスペルが、女心を学ぶ良い機会じゃないか」

思いもかけないソレイユの言葉にレイネは一瞬ぎくりと固まったが、その後に続けられた聞き慣れない単語に素っ頓狂な声を上げる。

「縁談？」

「そうなんだ、レイネ。良い話はあると聞いているんだが、ウェスペルはどうにも乗り気じゃないらしくてね。婚約者の一人も居ないんだ」

「弟である私が、兄上より先に妻を迎える訳にはいきません」

「ほら、こんな風に頭が固いんだ」

ソレイユは苦笑していたが、その表情は弟を想う兄のそれに思えた。ウェスペルの畏まった態度や、王族という言葉のイメージから兄弟と言っても堅苦しい関係なのかと思っていたが、そういう訳でもないらしい。ソレイユの態度にも、面倒そうに顔をしかめたウェスペルにも、どこか親しみを感じた。

「それに、女心に関して兄上には言われたくありません」

「それを言われると僕も耳が痛いね」

ソレイユは弟からの反撃に困ったように微笑する。どうやら、女心に関して二人はどっちもどっちのようだった。

ベッドの上のソレイユに見送られ、退室した玲音は思わずというように口を開く。それは誰かに向けてというよりも、独り言として零れたものだった。

「その年で縁談や婚約者だなんて、別世界の話みたい…」

しかし、そのささやかな呟きに答える者がいた。その人物は驚く事にウェスペルで、玲音は反射的に振り返る。

「事実、別世界の話じゃないか」

貴女にとっては、と続けたウェスペルの表情がわずかながら確かに笑みをかたどっていて、玲音は我が目を疑った。無表情の厳しい瞳ばかりを見ていた玲音は、ウェスペルが笑みを浮かべるなど想像も付かなかったのだ。

ソレイユとフィオルの兄弟で、彼だって人間なのだから感情があれば笑顔を浮かべる事も当たり前のはずだが、玲音は無意識の内にウェスペルを感情の無いロボットのような存在だと思っていたのかもしれない。彼の笑顔をにわかに信じられなかった。

ウェスペルはやはり見間違いだったのではないかと思わせるように、すぐに表情を収めると来たときと同じように真っ直ぐに前を見据えて歩き始める。玲音は、感情があると気付かされた彼に対し、初めて恐怖以外の想いが浮かんでいた。

新たな一面（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

繕わない言葉

玲音はウェスペルの微かではあるが、確かな笑みを見て、初めて彼に興味に似た気持ちが芽生えた。
相変わらずウェスペルは厳しく、その冷たい瞳に映される事に怯えてしまうが、それでも新しく灯ったその感情はロウソクの火のように弱弱しく揺れ動きながらも、けして消える事はない。

玲音は自分でもおかしな話だとは思うが、無意識とはいえ本気で彼はそれこそ森のように個人の意識など存在しないのだと思っていた。喜ぶ事も哀しむ事もない。もちろん、笑う事だってあり得ない。そんな風に思っていた彼が笑みを見せた事によって、玲音は当たり前の事であるが、ウェスペルも人間なのだと知った。それでもまだ怯える気持ちは根深くて、どこか半信半疑に、彼の中に潜んでいるかもしれない感情を探るようになる。

それは、未知のものへの好奇心のようだった。

玲音は部屋でぐったりとしていた。
顔色が悪く、いかにも具合が悪そうだが、彼女の不調の原因は身体ではなく精神的なものに起因していた。ドレスのスカートを握って俯き、何とか平静を呼び戻そうとしている。

その部屋でいかにも楽しそうな、小気味良い笑い声を漏らすのはフィオルである。彼女は相変わらず、何かと理由をつけては玲音の部屋を訪れていた。曰く、お稽古事をサボっても『鍵守様』の部屋まで逃げ込めば、侍女達も踏み込んでは来られないらしい。玲音は上手く利用されているような気もしたが、フィオルのそんな明け透けなところに好感を抱いているので、戸惑いながらも彼女の来訪を歓迎していた。

「謁見はウェスペルお兄様がお断りしてくださったらしいけれど、だからといってあんまり分かりやすくて面白いわね」

全てを知っているフィオルは可笑しそうに笑い声を立てる。今日はバルコニーでお茶をしたい、というフィオルの希望に応える為に、アリシアはそちらでお茶会の準備をしていた。アリシアの準備が出来次第、二人は室内からバルコニーに向かう事になっている。

玲音がこうも疲れ果てているのは、数日前にアルベルト・ダーウィンという名の貴族と会った事が原因だった。

『鍵守』が城に滞在しているという事は、市井には伏せられているが貴族の間では周知の事実である。玲音は王と謁見する際に何人かの貴族や騎士、侍女達とも顔を会わせていたのでその存在は隠しようが無かった。

玲音は全く知らなかったのだが、『鍵守』の滞在が明らかになるや多くの貴族から謁見の申し込みがあった。ウェスペルはその話が玲音にいく前に全て断っていたらしいのだが、今回アルベルトの紹介を受けた事で、ダーウィン卿だけが鍵守様との謁見を許されるなど贔屓が過ぎるではないか、という不満が湧きおこったのだ。

それでもウェスペルは、もうしばらく我慢するように説得してくれていたらしいのだが、何人かの貴族が先走った行動を取ってしまっ

た。

玲音が部屋から廊下に出る度に、知らない貴族が『偶然』通りかかるのだ。もちろん、訝しむまでもなく待ち伏せされていた事は明白である。

どうやら、アルベルトと偶然出会った事を仕方ないで片付けるのなら、自分が偶然鍵守様と出会ってしまう事も仕方がないだろう、という無茶な論法らしい。

「皆、必死なのよ。もしも天の使いである『鍵守様』のご加護を得る事が出来れば一族は安泰、大出世も夢ではないでしょうしね」

フィオルの言葉に玲音は力なく項垂れる。玲音自身はけして認めないが、それでも自身がこの世界において重要な役を割り振られてしまった事は理解している。それが彼らの勘違いであったとしても。だから彼らの行動も、フィオルの言葉も分からない訳ではないが、どうしても勘弁してほしい、という思いが湧いてきてしまう。ただでさえ、人と接する事が苦手であるのに、元の世界で教師くらいの年齢をした男性達に妙にへりくだった接し方をされると無性に居心地が悪いのだ。おまけに、打算の滲む媚を含んだ目はアルベルトの視線よりも敬遠したい。

フィオルに言わせれば、待ち伏せしている『分かりやすい』貴族はまだ可愛いもので、今はウェスペルの意に従ったフリをしている何を考えているか分からない、計算高く自在に駆け引きをこなす者達こそ厄介であるとの事だった。ぞっとしない話である。

ただでさえ見知らぬ外の世界を恐れ、あまり自室から出ない生活を送っていたが、今回の件で玲音は余計に部屋の外に出る事を億劫に感じるようになった。

「皆、分かっていないのね」

フィオルは肩を竦めるようにして言う。レースやフリルをふんだんに使ったドレスに身を包む西洋人形のように愛らしい少女は、しかし大人びた表情で目を細めた。

「レイネは普通の、ただ少し憶病なだけの女の子なのにね」

玲音はそっとわずかに顔を上げる。玲音はフィオルの、鋭いくらいに素直で残酷なほど包み隠そうとしないその少女の、繕わない言葉に救われていた。

フィオルはわずかばかりも玲音を神聖視したりしない。誰も彼も玲音を『鍵守』とし、憧憬の視線を向けるこの世界で、彼女だけは初めて会ったときから玲音を、年上のくせに頼りないただの女の子として接して来た。突然前髪を切る、という暴挙もフィオルが玲音の事を同じ『人間』であると認識しているからこそ出来る事だった。玲音に対し尊称を付ける事もなく、くだけた口調で話し、心のままの言葉をそのまま口にする。まるで、普通の『友達』みたいに――

「レイネ様、フィオル様。お茶の準備が出来ました」

アリシアに呼ばれ、フィオルは待ちわびた、といった様子で早々と立ち上がる。玲音を振り返って、彼女は花のように笑うのだ。

「行きましょう、レイネ」

玲音は彼女のそんな笑顔が、そう。何だか泣きそうになってしまうくらい、嬉しかった。

繕わない言葉（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

花咲く笑顔

フィオルとのお茶会を終えると、玲音は彼女に引っ張られて王宮内を散策する事になった。
玲音がまだ行った事のない場所を通って、彩り鮮やかな花が咲き誇る、王宮自慢の大庭園に案内してくれるとの事だった。

もちろん、と言うべきか、すっかり廊下に出る事を厭うようになってしまった玲音は全く乗り気では無かったのだが、フィオルの強引さに逆らえるはずもなく、アリシアに励まされて足取りは重いまま彼女について歩いていた。
しかし、妙に自信満々に私といれば大丈夫よ、と言いきったフィオルの宣言通り、あれだけ毎回のように顔を出していた貴族達は一人も現われない。彼らが現われない道をフィオルが選んで通ってくれているのか、はたまた何か別の理由でもあるのか、未だこの王宮内に明るくない玲音には分からなかったが、有難い事には変わりない。
玲音は少しだけ身軽な気持ちになった。

外壁を取り巻くように作られた階段をフィオルと連れだって歩いていると、いくらか下った所でフィオルが階段の外に目を向ける。すると、その場で立ち止まってしまった。不思議に思って玲音も同じようにそちらを振り向けば、そこは玲音の通っていた高校の二階くらいの高さがある。

どうしたの？と玲音が訪ねようとフィオルへ顔を向けると、彼女は見た事のない笑顔を浮かべていた。フィオルは普段から笑顔を浮かべているが、その表情はいつもの完璧な可憐さを体現したものでも、

淑女然とした微笑みでもなかった。思わず零れてしまったというような明るいそれは、年相応の子どものように無防備で幼く、玲音はフィオルの新しい一面に目を奪われる。

「ルーカス！」

フィオルは誰かの名前を呼ぶと階段から身を乗り出して、階下に向けて大きく手を振った。フィオルの危険な行動に、アリシアが慌てて彼女の行動を止める。

「フィオル様！危のうございます！」

「このくらい平気よ！」

フィオルの笑顔に惚けていた玲音は、そこでやっと思考が再開して彼女の行動の危険さに気付く。アリシアと共に青褪めながらフィオルに手を伸ばした。

「フィ、フィオル。危ないよ」

そこまで高所でもないが、もしもここから落ちてしまったら無傷では済まないだろう。運が悪ければ命に関わるかもしれない。平然と身を乗り出すフィオルを心配するのは当然だった。

「ああ、ちょうど良いわ。玲音にも紹介してあげる。ルーカス！」

フィオルは浮かれたような面持ちでそう言うと、一度下へ呼び掛ける。かと思えば、

「え……フィオル！？」

なんと、躊躇いなく壁を乗り越えると、そのまま宙に身を投げたのだ。玲音は反射的にフィオルへ手を伸ばしたが、間に合わずに彼女はゆっくりと地上へ落ちる。

「フィオル！！」

悲鳴のような声で彼女の名前を呼び、玲音は高所への不安も頭から吹き飛んでフィオルが元いた場所に駆け寄ると、咄嗟に彼女が落ちていった先を見下ろした。祈るような気持ちで覗き込めば、玲音の心配などまるで気に留めた様子もないフィオルが、武骨な格好をした男性に受け止められている。玲音は安堵から大きな溜息をつき、力が抜けてその場にへたり込んだ。

「レイネもいらっしゃい！」

最早下を覗き込む元気も、返事をする気力も無くなった玲音に、フィオルからは何とも明るい声が届いたのだった。

花咲く笑顔（後書き）

読了ありがとうございます。

力の抜けた身体で何とか立ち上がると、玲音はアリシアを伴って階下を目指して走っていた。フィオルの無事な姿は確認したが、一度きちんと向き合わなければどうにも落ち着かない。

ドレス姿の女性が廊下を走るなどはしたないと言われる行為で、階下に降り立つとすれ違う人々はぎょっとして玲音を振り返っていたが、異世界から来た自分には関係ない、と言い聞かせて玲音は構わず階段を駆け降りる。あの玲音が人の視線すら気にならなくなるほど、焦っていたのである。

日本の現代人である玲音より余程品のあるアリシアの方が、走り慣れない様子で玲音の背を必死に追っていた。

階段を駆け下りて、外へ通じる扉を探す。アリシアによってこちらです、と案内され、開かれた扉をくぐると、城の外壁のそばの庭に二人は階段から見たときの姿のままでそこにいた。

「フィオル様、落っことしたらどうするんですか。俺、首ちょんぱになりますよ」

「あら、落とさなければ良いだけの話ではなくて？」

「無茶言わんでくださいよ…」

その腕にフィオルを抱え上げているのは、短い赤銅色の髪を持つ二十代前半くらいの青年だった。背が高く、がっちりとした体格をし

ている。広い背中からはよく鍛え上げられている事が窺え、腰には大剣を下げており、鎧こそ身につけていないがその身分は騎士なのではないかと察せられた。

「フィオル…」

「レイネ、遅かったわね」

二人の親しげな様子に困惑しながら彼女の名前を呼べば、フィオルは悪びれる事なく振り返る。フィオルにつられるように青年もこちらを振り返り、何度か瞬くとぴしり、と固まった。

「フィオル様っ、も、もしやこの方は鍵守様では？」

「そうよ？」

「そういう事は早くおっしゃってくださいよ！」

青年は玲音の目から見ても明らかに冷や汗を流し、慌てて抱き上げていたフィオルを地に下ろす。フィオルは少しばかり不満そうに唇を尖らせていたが、青年はそれに気付く前に玲音の前で膝を折った。

「鍵守様とは露知らず、御前を失礼致しました」

青年は名乗らずに目を伏せて、謝罪の言葉を告げた。騎士や侍従といった身分の者達は、主人と目を合わす事は許されず、また勝手に名乗る事も許されていない。

玲音が顔を上げるように言おうとすれば、それよりも先にフィオルが口を挟んだ。

「あら、わたくしには膝を折らないのに、レイネには折るのね」

「前に、それじゃあ低くてつまらない、とおっしゃったのは姫様でしょうよ」

青年は呆れたように首を回してフィオルに苦言を呈す。玲音はフィオルと話すときの彼のくだけた口調や態度に驚いていた。この国のお姫様であるフィオルにそんな風に接する人を、玲音は初めて見た。

「良いから、ルーカスは早く立ちなさい。レイネ、良いわよね？」

「え？あ、はい！あの、楽に、してください」

フィオルに促され、玲音は慌てて頷く。すると、青年はあっさり立ち上がり、へらりと相好を崩した。謝罪を口にしたときの張りのある声とは随分印象が違う。褐色の瞳を細めた笑顔は、少年のような幼さがあった。

「レイネ、彼はルーカス・カルム。王国騎士団に所属している騎士よ。そして、こちらが噂の『鍵守様』。レイネと言うの、ルーカスもそう呼びなさいね」

「騎士と言っても商家の出身なんで、礼儀がなってないのは勘弁していただけると有難いですね。堅苦しいのはどうも苦手なんですよ」

「あの、私も、あまり丁重にされるのは、苦手なので…大丈夫です」

それは良かった、とルーカス・カルムと紹介された青年は、やはり気安く笑った。普段なら、こんな大きな男の人と向き合うなど気が引けてしまう玲音だが、ルーカスには自然とこちらの緊張感を解か

せる、不思議な雰囲気があった。

「しかも、そちらにいらっしゃるのはアリシア嬢じゃありませんか」

フィオルの無事を確認した後は他者の目がある場所という事で控えていたのだが、アリシアは急に話を振られて控え目に一礼した。

「知っていて？」

「美貌の侍女殿がいると騎士団ではもっぱらの噂ですよ。あとはまあ、ウェスペル様との事でも有名ですしね」

含みのあるルーカスの言葉に首を傾げていれば、彼は突然何かを思い出したように声を上げた。

「そうそう、ウェスペル様と言えば、今ウチにいらしてますよ。良ければ見学していかれませんか？」

それに楽しそうね、と答えたのはフィオルで、二人のやり取りを見ている玲音はウェスペルの名に反射的に緊張する。けれど、心のどこかで興味を示し始めている自分にも気付き、玲音はそんな自分に驚いていた。

姫君のお気に入り（後書き）

読了ありがとうございます。

騎士団の白雪

ルーカスの案内に従って向かったのは、王宮の片隅にある王国騎士団の宿舎だった。そばには鍛錬場があり、どうやら目的地はそちらであるらしい。

「さあ、いい加減覚悟を決めなさいな」

フィオルは軽やかな声調ながら、容赦の無い強引さで玲音の手を引いて歩いて行く。

騎士団の鍛錬場ともなれば、武骨な男性が数多く居る事は容易に想像出来た。実際、ルーカスの話では『むさ苦しい所ですねえ。俺より大柄な奴もザラですし、何しろ剣を振りまわしてんですから、血気盛んな荒くれ者の集まりですかね』という団体らしい。その時点で玲音が及び腰になった事は言うまでもない。

玲音は他人が苦手だったが、男性は特に苦手だった。今まで父以外の男性と関わる事がほとんどなかった為に、無条件に威圧感や恐怖心を覚えてしまう。そんな相手が沢山いる所など、玲音は当然のように忌避したかった。

しかし、フィオルがそんな理由で許すはずもなく、見かねたアリシアが助け船を出そうとしても、そうやってアリシアが甘やかすからいつまでも成長しないのよ、と軽くあしらわれてしまった。実年齢と関係の反転を改めて感じさせる瞬間でもあった。

「あれ？妙に静かだな…」

「ルーカス？」

人っ子一人見当たらない鍛錬場の入口にまで差し掛かり、ルーカスが不思議そうに首を傾げる。その背に向かってよく透る声が掛けられ、玲音もそろってそちらを振り返る。

すると、絶世の美貌を持つ少女がそこにいた。年は玲音と同じ頃で、肩までの白銀の髪は雪のような儚さを、青灰色の瞳は湖の静謐さを湛えていた。フィオルも神の祝福を受けたかの如く華やかな美少女だが、対して少女は神の使者かと思わせる神秘的な印象を受ける。表情を浮かべない無機質な面差しが、氷像のように完璧な美貌を際立たせていた。

玲音には自身よりも余程、『鍵守』という存在のイメージに合うような気がする。

小脇には何故かタオルを抱えており、着ているものはたっぷりとした袖の簡素な詰襟の上衣と活動的な短いスカートで、白く引き締まった足が惜し気もなく晒されている。こんなに丈の短いスカートを穿いている人を、玲音はこの世界で初めて見た。

「スノーリア、何してるんだ？それと、妙に静かだけど他の奴は？」

スノーリアと呼ばれた少女はフィオルに向かって一礼すると、無表情のままこてんと首を傾げた。初対面から一切表情に変化がないが、不思議とウェスペルのような近寄り難い印象を受けない。表情以外の仕草が妙にあどけないからだろうか。

「ローランド様とウェスペル様が手合わせをするという事で、皆こぞって鍛錬場に向かいました。私はお二人にタオルのご用意を」

「ウェスペル様が団長と!?あー、くそ。俺も見たかったなあ」

「まだ終わってないかもしれませんよ?誰も戻って来ていませんし」

ルーカスの言葉に淡々と答えるスノーリアは、くるりとその視線を玲音へと向ける。彼女の声は、雪のような容姿と同じく、あまり温度を感じさせないものだった。

「フィオル姫様と……こちらの方は?」

「ん?ああ、鍵守であらせられるレイネ様だ。つうか、俺が言えた立場じゃないけど遅すぎるだろ…こんなんだから王国騎士団って馬鹿にされるんだろうなあ」

ルーカスは呆れたように言ったが、その態度はどこかものぐさな感じを受けた。彼の言葉を、フィオルはあっさり振り払う。

「構わないわよ、言いたい者には言わせておきない。おまえ、スノーリアと言ったわね。名乗りなさい」

フィオルに指示されたスノーリアは滑らかな動作でその場に片膝をついた。それは淑女の礼ではなく、ルーカスと同じ騎士のそれである。

「王国騎士団に所属しております、スノーリア・シェルリングと申します」

「えっ!騎士、なんですか…?」

「恐れながら、王国騎士団の末席に名を連ねております」

玲音は唖然として言葉を失う。スノーリアの儚さすら覚える見た目の印象から、とてもそんな荒事をこなすようには見えなかったからだ。神官とでも言われた方が余程納得出来る。ルーカスと違い、彼女は剣も下げていなかった。

「こう見えて、騎士団歴は俺より先輩なんですよ」

「ルーカスより？おまえ、いつから騎士団にいるの？」

「六歳の頃より騎士団に身を寄せておりますので、十年ほど前からでしょうか？」

記憶を探るように、スノーリアは首を傾げつつ答える。彼女の言葉から察するにスノーリアは現在十六歳だろう。玲音は騎士団歴の長さもだが、自身と同い年であるらしい事実に驚きと納得を半分ずつ覚えた。同じ年くらいかとは思っていたが、浮世離れした雰囲気のスノーリアはいまいち年齢を察しにくい。

「ふぅん、初めて知ったわ。そんなに小さな頃から騎士団に女の子がいたなんて」

「実戦で使っていただけるようになったのは、ほんの最近ですから」

フィオルの言葉に淡々とスノーリアが答えた所で、大きな歓声が聞こえて来た。それは鍛錬場がある、と示された方からのもので、途端にルーカスが慌て始める。

「やば、話しこんでたら決着ついちまったのか？ささ、早く行きま

しょう！」

ルーカスに案内されて、一行は王国騎士団の入口から鍛錬場へと向かった。

騎士団の白雪（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

王国騎士団団長

鍛錬場といって案内された場所は、学校のグランドのような広場だった。穏やかな風の中でも、薄らと砂埃が舞っている。
その中心に立っているのは剣を構えたウェスペルと、同じく剣を構えた大柄な男性だった。二人は何事かを話しながら、時折剣を交えたりといった事を繰り返している。そこには手合わせという緊迫感はなく、何かを確認し合っている様子だった。

その広場の回りには多くの屈強な男性達が立っていた。甲冑を身につけている者もおり、彼らはそれぞれにウェスペル達と同じように剣を構えている者もいれば、何事かを談笑して大きな笑い声を上げる者もいた。

「あちゃー、どうやら決着はついちまったようですね。どっちが勝ったのかな？」

「あのケイパー騎士団長との手合わせで『決着』なんて、お兄様ってそんなにお強いの？」

「強いですよ。そりゃあ、技量じゃまだ団長の方が上ですが、瞬発力が半端じゃないんですよねぇ。一瞬の速さには団長も舌を巻くほどです」

フィオルは驚いたように目を見開く。彼女の驚きの表情を初めて見たので、玲音にはいまいちピンとこなかったウェスペルの剣の腕前が相当なものであると悟る。

「ローランド様、ウェスペル様」

スノーリアが広場の中心に立つ二人の下へ駆け寄って、タオルを差し出す。それを受け取ったウェスペルは、スノーリアに何か声を掛けられるとこちらを振り返った。彼は遠目でも分かるように一瞬目を見開いたが、騎士団長に一礼をすると険しく眉を寄せて彼女達の方へ歩いてきた。怒りを感じさせるその表情に玲音は心臓が縮みあがりそうになる。

「フィオル！どうしておまえがここにいるんだ」

「ルーカスに連れてきていただきましたの。愛しのお兄様の勇姿を拝見出来ると聞いては、我慢なんて出来ませんわ」

フィオルは薔薇色に染めた頬を両手で覆って、恥じらうように俯いた。一見すると恋する乙女のように可憐で愛らしかったが、彼女という人間をよく知っている者からすれば悪ふざけにしか見えない。実際に、ウェスペルの機嫌は目に見えて下降した。

「馬鹿な事を言っている暇があれば、さっさと戻れ。ルーカスに会いたいのなら、立ち合うからまずは俺に話を通すんだ」

「嫌ですわ、お兄様ったら！男女の逢瀬に立ち合うだなんて、無粋も良い所ですわ」

「ちょ、姫様！俺、首ちょんぱ！首ちょんぱ！」

演技がかったフィオルの言葉に、ルーカスは青ざめる。騒ぎに気付いた騎士団の面々は、お姫様の登場に一度は居住まいを正したり顔

を強張らせたりと忙しかったが、しばらく騒ぎの様子を眺めるとすぐに緊張を解き、先程とは打って変わって今度は口笛まで吹いていた。骨は拾ってやるからなー！とルーカスに野次が飛ぶ。それ以外の一部の者は、密やかに背後に控えるアリシアに視線を送っていた。

「ったく、おまえは……レイネ殿まで、こんなところに…」

不機嫌そうな視線を向けられ、玲音は思わず肩を震わせる。ウェスペルに対しささやかであれ興味を抱き、彼の友人になって欲しいというソレイユの言葉を受けて、もう少しウェスペルとも前向きに接したい、と願っていたが、そんな目を向けられると玲音の脆い勇気はあっさりと砕け散ってしまった。

「レイネ様はわたくしがお連れしましたの。ずっとお部屋にいるばかりでは、気が滅入ってしまいますものね」

ねぇ？とフィオルに突然話を振られ、反射的にうなずいてしまう。人目を避けたい玲音が自ら部屋に閉じ籠っていたのだが、改めてそう言われてみれば、確かに心身に対し不健康な行為だったかもしれない。

そうしていると、やけに豪快な笑い声が上がる。

「お許しになられてはいかがですか、ウェスペル様。妹君の可愛い我がままに、そうお怒りになるものではありませんよ」

大柄で、何とも体格の良い男性だった。見上げるようなその人物は金茶色の髪を無造作に一纏めにし、髪よりも少し濃い色の瞳は楽しげに細められ、豪放磊落という言葉を体現したような人物である。年は五十前後と見えるが、鍛え上げられた肉体は衰えを知らず、年齢よりも若々しい印象を受けた。

何事かを考え込んでいたらしく、いつの間にか難しい顔をして目を伏せていたウェスペルは、その声にようやく顔をあげるとそちらを振り返る。

「ローランド、フィオルの行動はいつも『可愛い我がまま』の範疇を越えている」

「あら、お兄様ったら分かっていませんのね。『可愛い我がまま』というのはその内容が可愛いのではなくて、女性の我がままを可愛いと受け入れる男性の度量を示しておりますのよ」

「これはウェスペル様、一本取られましたな」

そう言って男性はまた明るく笑うと、今度はフィオルと玲音に向き直り丁寧に一礼した。その髪の色も相まって、太陽のように明るい人だと玲音は思う。

「ご無沙汰しております、フィオル姫様。そして、レイネ様にはお初にお目にかかります。私はローランド・ケイパー。この王国騎士団にて団長を務めさせていただいております」

自己紹介を受けて、玲音も慌ててドレスの裾を持ち上げて一礼する。こちらで騒いでいる内にスノーリアはどこかへ行ってしまったようで、彼女の渡したタオルはローランドの手にあったが、スノーリア自身の姿は見られなかった。

「あ、あのっ、レイネ・サエハラです。よろしくお願い、します」

玲音の挨拶を見届けて、軽く一礼したフィオルはローランドに問い

かける。

「ケイパー騎士団長はお兄様の師でもあるのよね？」

「恐れながら、ウェスペル様には剣の手ほどきをさせていただきました」

「昔はこんな小さい子どもが剣に振りまわされていたのに、ご立派になられましたよねぇ」

ルーカスはしみじみと呟きながら、自身の腰の辺りでひらひらと手を振る。ウェスペルはそんな彼の動作に非常に嫌そうな顔をした。

「まあ！剣に振り回されるお兄様だなんて、そのときにお会いしたかったですわ」

「つまらない事にばかり興味を持つな」

「良ければ、今度兄君の昔話でもお聞かせしましょうか？」

「ローランド！」

遮るように強く名前を呼んだが、ウェスペルは一度大きな溜息をつくと気持ちを落ち着け、玲音の見慣れた無表情を取り戻す。森のように荘厳で排他的な面差しは、一瞬で全ての感情を削ぎ落したようだった。

「客人の前で身内話ばかりするものではない。フィオルも、あまりここへは来るな。おまえの為に言っているんだ。分かるだろう？」

ウェスペルの言う客人とはもちろん玲音の事である。せっかくフィオルが楽しそうにしていたのだから玲音としてはその邪魔をしたくなかったのだが、それを伝える為の言葉をすぐに選ぶ事が出来なくて口ごもる。諭すようなウェスペルの言葉に、フィオルは頬を膨らませて顔を背けると、玲音が何か発するよりも早く、尖らせた唇が文句を口にする。

「お兄様はずるい。わたくしの為とおっしゃって、文句の言葉さえ取り上げてしまわれるのですね。わたくしはただ、お兄様みたいに普通にルーカスに会いたいだけですのに」

それは、お気に入りのおもちゃを取り上げられた小さな子どものような反応だった。フィオルという少女は我儘を言うときでさえどこか計算ずくで、不平を口にするときもいつも余裕のある微笑みを含んでいた。そんな彼女の不満を隠そうともしない、あどけなさを感じる表情や態度が意外だった。

ルーカスが困ったように頬をかいて、フィオルと視線を合わせるように屈む。

「そう言っていただけるのは嬉しいんですけど、俺に会いにきてくれたせいでフィオル様が悪く言われたら、俺は哀しいです」

「……分かっているわ。今回はレイネがいるから、案内という体裁を取れば良いと思ったのだけど、浅知恵だったわね」

フィオルは少し俯いてルーカスの言葉を受け入れると、顔を上げる次の瞬間にはすでにいつも通りの彼女に戻っていた。完璧に美しい、花のような彼女の笑顔。

「ごめんなさい、お兄様。お兄様があんまり頑なにわたくしを追い

出そうとされるものですから、わたくしも少しばかり意地を張ってしまいましたわ」

反省の言葉に含まれた皮肉さえいつものフィオルらしい、と玲音は苦笑する。ウェスペルは呆れを含む溜息をついた。

王国騎士団団長（後書き）

ちょっと長めかな？
読んでいただきありがとうございます。

そのとき、ちょうど見計らったかのようなタイミングで、一人の少年が現われた。玲音はその少年に見覚えがあり、あっと目を見開く。

「ウェスペル様、予定していた視察の準備が整いましたので、お迎えに上がりました」

まだ幼さの残る知的な顔立ちの、こげ茶色の髪に明るい若葉色の瞳をした少年。彼は、玲音がこの世界に来たとき、ウェスペルと共にいた少年だった。

裾の長い上衣を翻して、少年は落ち着いた動きでこちらに歩み寄ってくる。

「やあ、マルクス。ここに来るのは久しぶりじゃないか？」

ルーカスが軽く片手を上げて、マルクスと呼ぶ少年に挨拶をすると、彼はその場で一度ぴたりと固まった。俯いて身体を小刻みに震わせ、次の瞬間には勢いよく顔を上げる。

「ルーカス・カルム！何だその気安い挨拶は！！僕らは友達か！？」

「えっ、違うのか？」

「何をとぼけている！僕は貴族で君は商家出の騎士だ。身分が違うだろう！敬称を付けて相応しい言葉を使え！」

「堅い事を言うなよ。俺がそういうの苦手なのはよく知ってるだろ？」

「苦手とかそういう問題じゃないだろう！」

物凄い勢いで激昂したマルクスは、苛立ちをそのままに声を荒げる。しかし、文句の相手であるルーカスは彼の言葉を柳のようにするするとかわしてしまうので、余計に発散されない苛立ちが募っているようだった。

「大体、僕はウェスペル様に報告したのに、そのウェスペル様より先に口を開く辺りがまた非常識というか礼儀知らずというか…！」

唸るマルクスだが、対してルーカスには全く堪えた様子もない。いかにも鍛え上げられた長身のルーカスと、細身で小柄なマルクスでは大人と子どものようだった。そんな二人を見かねて、しかし実に楽しそうに口を挟むのはローランドである。

「マルクス殿、ルーカスの不敬は騎士団団長として代わりに謝罪致しますが、ここはウェスペル様だけではなく、姫殿下と鍵守様の御前ですよ」

ローランドの言葉にはっとして我に返ったマルクスは、その視線をウェスペル、フィオル、玲音の順に移動させ、気色ばんでいたその顔を一気に青褪めさせた。

「ごっ！御前を失礼致しました！」

マルクスは勢いよく頭を下げる。可哀想なほど血の気の引いた彼に玲音が困惑していると、ウェスペルが顔を上げるように言った。フ

ィオルは興味深そうに目を輝かせている。

「マルクスは一つの事に集中すると回りが見えなくなる。気を付けた方が良い」

「は…お恥ずかしい限りです」

再度、その言葉の通り羞恥と申し訳無さをない交ぜにしたような様子で、マルクスは頭を下げる。そんな彼を見届けて、ウェスペルは玲音達を振り返った。

「フィオルは知っているな。彼はマルクス・グランフェルト、私の仕事の手伝いをしてもらっている。レイネ殿も一度会った事があるが、覚えておられるか？」

「えっ、あ、はい…初めてこの世界に来たときに、ウェスペル様と一緒にいらした方、です、よね……？」

視線を泳がせながら何とか答えれば、不意にマルクスと目が合った。彼はすぐに模範のような礼をもって頭を下げる。

「覚えていただけておりましたとは、恐悦至極にございます。私はグランフェルト家が当主、マルクス・グランフェルトと申します。お見知りおき下さい」

落ち着きを取り戻したマルクスは、いかにも貴族然とした少年だった。爪先から髪の毛一本にまで行き届いた優雅な身のこなし、気負わずとも自然と払われる礼儀に滲み出る品格。性格や見た目はともかくとして、そういった所が少しだけアリシアと似ているように思えた。

フィオルにも同じように丁寧に挨拶を済ませると、マルクスは先程までの激昂など嘘のように冷静な顔をして、改めてウェスペルに報告をした。

「城下に向かわれる準備が整いましたが、今すぐ出発されますか？」

「ああ、その事なんだが、ちょっと待ってくれ」

ウェスペルはマルクスに向けていた視線を玲音へとやって、じっと彼女と目を合わせる。玲音はびくりと肩を震わせたが、何とか目を逸らさずにすんだ。

「良ければレイネ殿もご一緒されないか？せっかく滞在されているのだ。この国を知っていただく良い機会であるし、気晴らしにもなろう」

突然のウェスペルの申し出に、先に歓声を上げたのはフィオルの方だった。

「まあ！それは名案ですわ。ぜひ行ってらして、レイネ様。この国はとても良い国よ。その事を知っていただくには、城下をご覧になっていただくのが一番ですわ」

フィオルの言葉が、玲音を勇気付ける。

玲音自身、お城の外、という場所には興味があった。初めて現われた森から王宮に辿り着くまでにちらりと見ただけだったが、城下町は明るく賑わっていた。あのときはそれどころでは無かったが、今思い返してみれば人込みが苦手なはずの玲音でも心惹かれる明るさだったように思う。

何より、フィオルがこんなにも勧めてくれる場所なのだ。彼女を信頼する玲音が興味を持つには、それで十分だった。

「どうされる？レイネ殿」

「は…は、はいっ。あの、ご迷惑でなければ、ご一緒させてください」

こうして急遽、玲音は初めて城の外に赴く事になった。期待と不安で高鳴る胸をなだめようと深呼吸していると、目が合ったフィオルに微笑みを向けられる。その表情からは、城下へ行く事を同じように喜ぶ気持ちも感じられれば、ウェスペルから視線を逸らさずに返事を出来た事を褒めてくれているようでもあった。

年下の女の子にそんな心配をされる事を情けなくも思うが、それ以上に玲音はフィオルがそんな風に自分の事を気にかけてくれる事が嬉しい、とそう思う。

ウェスペルはその場にいる者達に次々と指示を出し、アリシアに何事かを申し付けていると、いつの間にかいなくなっていたスノーリアが戻ってくる。

「スノーリア、これからレイネ殿も加えて城下に行く事になった。君も護衛に入ってくれ」

「かしこまりました」

一礼してスノーリアが命令を受け取ると、思いもよらない所から声が上がる。それは、先程までウェスペルに付いて静かに自身の仕事をこなしていたマルクスである。

「スッ！ススススノーリアも来るのですか！！？」

その顔はトマトのように真っ赤に染まっていた。露骨にうろたえ、反射的にスノーリアの方を見たが、また慌てて顔を背けてしまう。その動揺に含まれる意味など明らかで。

急激に怒る怖い人なのかと思いきや、その様子を見てしまえば何だか憎めない人かもしれない、と玲音は思った。

王子様の秘書（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
新キャララッシュは、一応これでおしまいです。
その内人物紹介とか載せたいです。

賑わう城下町

カルディア王国は緑豊かな土地の恩恵により繁栄して来た。大国と呼ぶほど広大ではないが、その分統治が行き届いており、小国と呼ぶには発展した国である。温暖な気候により作物の実りがよく、国内での自給自足が可能となっていた。

加えて、鍵守が降臨した土地として信者達の巡礼地となっている。他国の出入りも多く、商人や旅人も多く立ち寄るので、他国の文化や情報などもよく行き渡っていた。

王宮の眼下に広がる城下町は、そんな国柄らしく笑顔の飛び交う賑やかな町である。多くの店が立ち並び、広場では大道芸も披露されていた。

玲音はそれら全てに目を輝かせて見入っていた。活気ある街はそれだけで心惹かれるものがあり、見るもの全てが珍しく、人込みを苦手とする玲音が息苦しさを感じないほど夢中になっていた。

一緒に来られなかったフィオルにも見せてあげたい、と玲音は思う。

城下に行く事になった玲音は、普段着ているドレスからアリシアが用意してくれた簡易なワンピースに着替えた。市井に顔は知られていないので『鍵守』である玲音が街に下りても騒ぎにはならないが、普段王宮で過ごすような出で立ちではどこの貴族令嬢かと別の注目を集めてしまう。

だからといって馬車の中から外の様子を覗くだけではつまらないから、と街中を歩いてもおかしくない格好に合わせたのだ。アリシアからは、貴族ではないがさる企業のお嬢様のようであると言われた。

「まあ、レイネ様。ご覧になってください。あの方、何も無い所から次々と物を取り出していらっしゃいますわ」

「ほんとだ…手品みたい。すごいね、アリシア」

アリシアはびっくりした様子で大道芸を繰り広げる男性を示す。共に城下にまで来てくれたアリシアもまた、いつものメイド服を脱いで玲音に合わせ、藍色のシンプルなワンピースに着替えていた。普段結い上げている髪を下ろしていると、大人っぽい彼女も年相応に見える。

王宮では立場を弁えて常に控えているアリシアだが、人の目を気にしなくて良い城下では、普段二人で部屋にいるときのように玲音を気遣いつつも、率先して珍しいものや面白いものを見付けては教えてくれた。

何も持たない両手から、花に始まり鳥や果物、果ては剣まで次々と手品のように取り出してくる大道芸人を眺めていれば、その人物は不意にこちらに気付く。派手な催しの割に地味で目立たないローブに身を包んだ素朴な印象の男は、人懐っこい笑顔で興味深そうに眺める玲音達客に対し、丁寧に一礼した。

「へえ、どこに隠し持ってんだか。すごいな」

「普通に考えればローブの中でしょうが、それにしては体積が合いません」

二人の後ろからのんびりと付いてきているルーカスとスノーリアも感心した様子で大道芸に目をやる。夢中になって見入っていた玲音は、聞こうと思っていた事を思い出した。

「あの、お二人は、本当に私に付いてきていただいて良かったんですか？ウェスペル様の護衛は…」

二人はウェスペルの命により、玲音達の護衛として同行していた。この四人とウェスペル、マルクスで城下まで下り、用を済ませると言う二人を城下にある屋敷の前で下ろし、その間に玲音達が街を見て回ることになった。その折りに、ルーカスとスノーリアを玲音の護衛に付けてくれたのだ。ルーカスが剣こそ下げているが、どうりでこの二人も随分軽装に着替えている訳である。

マルクスが剣を扱える人とは思えず、王子様が護衛も無しに出かけて良いのだろうか、と思う気持ちが芽生える。護衛を二人とも付けてもらった事が、玲音には申し訳無かった。

「心配は御無用でしょう。お尋ね先にも護衛はいるでしょうし、何よりウェスペル様です。マルクス様をお庇いになられながらでも、滅多な相手でないと傷付けられる事もないでしょう」

「『殿下』に庇われるってなると、マルクスは相当落ち込むだろうけどな。まあ、そんな感じなんで大丈夫ですよ。ここだけの話、ウェスペル様は俺らより腕が立つんです」

スノーリアに続き、ルーカスは何故か楽しそうに内緒話でもするように囁いてから、何かを閃いたように声を上げた。悪戯を思いついた子どものような顔である。

「でも、俺は正直ウェスペル様に付いて行きたかったなーって思ってます」

「ご、ごめんなさいっ！私なんかに……」

「あ、いやいや！そういう意味じゃなくて！！」

泣きそうな顔で俯いた玲音に、ルーカスは慌てて否定の言葉を口にする。誤解を解く為にも、冷や汗を流しながらルーカスはその言葉の意味を伝えた。

「男一人で美人ばかり連れてますからね。さっきから道行く男達の視線が痛いんですよ」

ルーカスの言葉の意味が分かって、玲音は納得して苦笑する。アリシアもスノーリアも飛びぬけて美人であるので、共に歩く男のルーカスはやっかみの視線を向けられても不思議ではない、と。

育ちの良さそうなアリシアと、どこか浮世離れしているスノーリアはきょとんと揃って首を傾げていた。

賑わう城下町（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

彼の本質

馬車から下ろされたのと同じ場所、城下の中心部から少し外れた広い場所で今度は馬車に乗り込み、玲音達はそのまま城に戻る事になった。

行きには六人で乗っても広々としていた馬車に今は四人で乗っており、同じ馬車でも玲音は余計に広く感じる。しばらく大人しく馬車に揺られていたが、いつまで経っても馬車には止まる様子がない。馬車に付いている窓にはカーテンが引かれているので外の景色は窺えないが、ウェスペル達が下りた屋敷から広場まではこのくらいの時間でついたはずである。

不安に思って玲音が周囲に視線を巡らせれば、目の合ったルーカスが玲音の疑問を察してくれた。

「ああ。先にレイネ様をお送りするよう仰せつかっていたんです。ウェスペル様の事は後でお迎えに上がるので、ご心配なく」

城下町の中にある屋敷の前で別れて以来、ウェスペルらとは顔を合わせていない。という事は、ルーカスは城を出る前からそう指示されていたのだろう。

玲音は、自分が街に興味を持ったせいで、ルーカスとスノーリアに二度手間を踏ませてしまった、と申し訳なくなる。

「すみません、私のせいで…」

「気にしないでください。俺らはこれが仕事です。ウェスペル様だ

って、本音では護衛なんていない方が気楽だと思ってるんですから」

「それに、ウェスペル様にはマルクス様がついてらっしゃるので、安心です」

ルーカスに続くスノーリアの言葉に、マルクスではウェスペルに庇われるのではなかったのか？と『安心』という言葉に少々疑問が湧いたが、二人の様子にこれ以上謝っても困らせるだけだろう、と曖昧に頷く。

そんな玲音に対し、ルーカスは落ち着いた微笑みを見せた。

「実はね、レイネ様。俺らは前からレイネ様の事を知っていたんですよ」

「え…？」

「ウェスペル様が随分お悩みでした。怖がらせてしまった事が申し訳ない、と」

ルーカスは笑みを苦笑に変えて、肩を竦める。

「そんなあっさり心中を晒すような人じゃないんで、直接おっしゃった訳じゃありませんけどね。どう接すれば怖がらせないのか、と珍しく頭を抱えていらっしゃいましたよ」

「私は、女性として生活で困る事は何か、と聞かれました。もっとも、私は男所帯で育ったので、あまりお役に立てませんでしたが」

続くスノーリアの言葉も聞いて、玲音は驚きから目を見開く。面倒をかけ、その上失礼な態度ばかり取る自分はウェスペルに嫌われて

も仕方ないと思っていた。嫌われて当然である、と。だから、余計に彼が怖かったのだ。玲音は他人を拒絶するのに、嫌われれば自分勝手に傷付いてしまうから。

戸惑いと信じられない気持からアリシアを振り返れば、彼女は温かく微笑んでいた。どこか嬉しそうに、慈愛に満ちた眼差しで。

「ウェスペル様はいつも、レイネ様のご様子を気にかけていらっしゃいました。不便はないか、困っている事はないか、悩みはないか。ウェスペル様はお厳しい方です。ですが、冷たい方ではありません。見知らぬ世界で、不安でいらっしゃるレイネ様がせめて不自由をなさらないように、いつも心配なさっています」

アリシアは、心を込めて玲音の知らない真実を告げた。それらの事に全く気付いていなかった玲音は、混乱して上手く思考が纏まらない。

「不器用なんですよねぇ。今回の事もレイネ様の気晴らしになれば、と誘われたようですよ」

困ったように教えてくれるルーカス。スノーリアは青灰色の瞳で無感情に、しかし確かな実感を込めて呟く。

「ウェスペル様はお優しい方です。そういう、優しさを持つ方です」

「表現がむっちゃくちゃ下手くそですけどね」

悪戯を仕掛ける小さな子どものような顔で、ルーカスは笑う。三人に教えられ、思考が落ち着いた玲音はようやくウェスペルを誤解していた事を悟った。

それは、三人が教えてくれた内容以上に、この三人がこれだけ彼を想い、誤解を解こうとしているという事実が、玲音にウェスペルの本来の姿を窺わせる。

それは自分が勝手に彼に怯えていただけなのだ、という事も確かにさせ、羞恥とそれ以上に罪悪感が湧き上がってくる。自身のあの態度に対しても気にかけてくれていたという事は、怖いどころかかなり懐が深い人なのかもしれない。

「ああ、でも気になさる必要はないと思いますよ。それを上手く態度に出せないウェスペル様にも問題があったという事で」

両成敗です、とルーカスは気軽に言う。ウェスペルと騎士団の彼らは立場を弁えた接し方をしているようで、その実友人のような親しさを感じられた。玲音は思わずくすりと笑う。

彼らと話していると、肩の力が抜けて、ほんの少しの勇気が湧いてくるようだった。それは、元の世界では持つ事も厭うていた勇気。他人と歩み寄る為に、自ら努力してみたいと思った。アリシアやフィオルだけでなく、こうしてルーカスやスノーリアまで見守ってくれているのだから。

彼の本質（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
鍵守のレイネでは、始めての携帯投稿で無意味に緊張…

踏み出したい一歩

風呂も済ませ、すっかり寝る準備が整った玲音は、夜風に当たりたくなってバルコニーへと出る。初めの頃は、玲音が寝付くまで世話をする為にこんな時間でもアリシアが部屋にいてくれたのだが、慣れて来た最近では遅くまで彼女の手を煩わせるのも申し訳なく、寝る準備だけ終えるとアリシアにも早々に休んでもらうようにしたのだ。

バルコニーは、白やクリーム色を基調とした部屋と同じように、床も柵も手すりも全て白で統一されている。暗闇のなか、月明かりによってバルコニーの白が浮かび上がり、何だかとても幻想的に見える。それこそ本当に、お伽噺の中の光景のように。

月明かりを辿って夜空を見上げれば、そこには半分より少し欠けたくらいの月があった。この世界でも、元の世界と同じように美しい月が、夜空を照らしているのだ。

日中は春の陽気をしていたが、夜風はさすがに涼しく、落ち着かない気持ちを静めてくれるようで、玲音はそっと安堵するように息を吐く。

彼女は今日の日中の事を思い出していた。本当に色々な事があった。ルーカス、スノーリア、ローランド騎士団長にマルクス、と多くの人と初対面を果たし、フィオルの新しい一面を見て城下にまで行ったのだ。

それに、ウェスペルの事である。

「う…やっぱり緊張する」

途端に鼓動が速くなり、玲音は何とか気持ちを落ちつけよう、と深呼吸を繰り返す。

帰りの馬車で、玲音はウェスペルの事を誤解していたのだ、と教えられた。それを知って少しの勇気が湧くのを感じ、今までの失礼な態度を何とか謝りたい、と思った。しかも、よくよく思い出してみれば、結局彼の母のドレスを借りた事の礼もまだ伝えられていないのである。あまりに礼儀知らずである自分に思わず血の気が引いた。

勇気が湧いたはずなのに、憶病な性格が治った訳ではないので、こうして一人ひっそりと覚悟を決めようとしてもその事自体に緊張してしまう。今こうしていても仕方ないから、と眠ろうにも落ち着かなくてそれも出来ないだろう。

加えて、あの後聞いた話では、ウェスペルは相当多忙であるらしい。王子としての執務もあれば、場合によっては身体の弱いソレイユに代わって彼の分の公務を果たす事もある。今日のように市井に顔を出す事もあれば、貴族との会談も積極的に受けるらしい。

そんな中で玲音の事も気にかけ、世話をしてくれているというのだから、彼女はますます罪悪感に苛まれた。尚の事早く謝罪を伝えよう、と思うと明日いつものように様子を見に来てくれたときに伝えるのが一番なのだろうが、果たしてそれまでに玲音の心の準備が整うだろうか。否、整えなければ、先延ばしにすればますます勇気はしぼんでしまうだろう。

玲音は深呼吸をして、少々むりやりに覚悟を決めた。

夜風が心地よいと思いつつも、いつまでもバルコニーにいては湯冷めしてしまう。大丈夫大丈夫、と自己暗示を繰り返し、玲音は何気なくバルコニーの下方に目を向け、

「え……？」

人影を見つけた。しっかりとした歩みで中庭を歩いていく人物に目を奪われて、思わずその人物の名前を呟く。

「ウェスペル様？」

その人物は確かにウェスペルだった。この暗がりの中だが、月明かりと等間隔に設置されている明かりに映しだされたその姿は、確かに彼のものだった。

驚いてぽつりと漏れ出たものなので、その声はそれほど大きくなかったと思う。ましてや彼の立っている所からこのバルコニーまでは結構な高さがある。

けれど、ウェスペルは不意に立ち止まると左右を見回し、上を見上げた。その瞬間、しっかりと玲音と目が合ったように見えた。

玲音は内心で短い悲鳴を上げ、反射的にバルコニーに背を向けてその場で座り込んでしまう。そして、その行動をしてから我に返った。先程、明らかに目が合っていたのに、それを逸らした所か咄嗟にバルコニーの陰に隠れるなど、避けています、と言っているようなものだ。いや、確かにこれまでは出来るだけ避けたいと思っていたのだが。

目が合ったのは気のせいかもしれない。ウェスペルの位置からでは、玲音は逆光になっていたはずである。それでも人影があるのは分かっただろう。ここは玲音に与えられた部屋のバルコニーなので、見上げた瞬間にバルコニーの陰に隠れた人物が玲音である、ということはウェスペルには簡単に分かったはずだ。

玲音はそろりと背後を振り返り、白い柵の隙間から下の様子を窺う。すると、そこにはまだウェスペルの姿があった。

途端に緊張して、心臓が早鐘を打つ。弁解をしたい。何をどう伝えれば良いのか分からないが、驚いてしまっただけで今の玲音にはウェスペルを避けようという気はないのだ。むしろ、避けずにきちんと向き合ってみたいとさえ思っている。

玲音は恐る恐る立ち上がり、バルコニーの上から顔を覗かせる。すると、やっぱりウェスペルはこちらを見上げているようだった。

「あ、あの…」

とりあえず何か言わなければ、と口を開こうとしたが、この高さではなかなか地上までは届かない。だからと言って、もう夜も更けたこんな時間に大きな声を出すのは気が引ける。何より、玲音は大きく声を出す事が苦手だった。

どうしよう、とあたふたと焦っている内にウェスペルはすっと歩みを再開してしまう。

「あ！……」

玲音にそれを呼びとめる術は無く、彼はあっさりとその場を去って行ってしまった。

ウェスペルからすれば、玲音はただじっと見下ろしてくるだけだったので、それも仕方がない。精々怪訝に思われた事だろう。

せめて、何か挨拶をするとか、思い切り隠れてしまった事の弁解くらい出来ないものか。玲音は自分の鈍さにがっかりと肩を落とした。

溜息を吐いて、未練がましくここにいても仕方がない、と室内に戻る。窓の施錠をして寝室の扉に手を掛ければ、ノックの音が部屋に響いた。こんな時間に誰だろう、と首を傾げながら玲音は部屋の扉に向かう。そういえば、普段はアリシアが来客の取り次ぎをしてくれるので、自ら応対するのはこちらの世界にきて初めてである事に気付いた。

来客はそのアリシア自身だろうか、と思う。お姫様であるフィオルはこんな時間に出歩く事はまずないらしく、それなら玲音にはこんな時間に他の来客の心当たりがなかった。

「はい。……！？」

扉を開けて、玲音は息を呑む。反射的に扉を閉めなかった自分を褒めてあげたいくらい、彼女は驚いていた。

「夜分遅くにすまない。こちらを見下ろす姿が見えたので、何か用かと思ったのだが」

そこに立っていたのはウェスペルだった。昼間に見掛けるシンプルでありながら騎士のようなしっかりとした意匠の服ではなく、簡素で比較的ゆったりとしたものを身に纏っている。

「……違ったか？」

「あ、いえっ、あの、用という訳ではないんですけど、えっと……」

玲音は俯きそうになる顔を必死で押しとどめながら、言葉を探して

いた。彼を見付けたのは偶然で、あからさまにバルコニーの陰に隠れてしまった事の言い訳をしたかっただけで、ウェスペルに赴いてもらうほどの用事はない。それなのにまた、彼を煩わせてしまった事が玲音に焦りと申し訳無さを及ぼしていた。
玲音はウェスペルの軽装とは不釣り合いな、左手に持たれた剣の存在にふと気付く。

「あの、ウェスペル様は、ど、どちらに、行こうとしてらっしゃった、んですか？」

思えば、この世界に来たばかりの頃は『様』と敬称を付けて呼ばれるのと同じくらい、呼ぶ事にも違和感があったが、今では普通に彼の事も『ウェスペル様』と呼べるようになった。
現代日本人としての違和感よりも、ほとんどの人に『様』付けされている人を『さん』付けで呼ぶような度胸は玲音にはない。ウェスペルの事を呼び捨てにする人など、未だに王とソレイユしか見た事がなかった。

「私は王国騎士団の鍛錬場に行く所だ」

「鍛錬場？こ、こんな時間に剣の練習、ですか？」

「ああ。時間が空いたのでな」

答えるウェスペルの声は素っ気無い。思い返してみれば、彼はいつもそんな調子のようだが、それでも玲音の心が折れるには十分に思えた。
ウェスペルの森の瞳が、玲音の言葉を待つように彼女を映す。玲音の胸は緊張で張り詰め、息が苦しい。冷や汗が背中を伝っていた。

ごめんなさい何も無いんです、と言って部屋に戻る事は簡単だった。けれど、ウェスペルが何かあったのかとわざわざ訪ねて来てくれたこの状況で、それをするのは何故だか逃げだと思ったのだ。玲音はフィオルに言われた『甘ったれ』という言葉を思い出す。

玲音はもう、気の小ささを言い訳にしたくなければ、きちんと人と向き合う努力をして自分に自信が欲しいのだ。優しくしてくれる回りの人達に、甘えるばかりではなく。

「あ、あの！良ければ見学させてもらえませんか！？」

思いの外大きくなった玲音の声に、ウェスペルは驚いたように目を丸くした。

踏み出したい一歩（後書き）

読んでいただいえありがとうございます。
長らく、パソコンの不調により更新停止状態でしたが、ようやく復帰する事ができました。
今後もよろしくお願いいたします。

月光の下で

玲音には質素なワンピースに見える寝間着だが、それで外に出るのははしたない事であるらしいので、城下に出かけたときのような一人で着られるワンピースに着替え、ストールを羽織って先導するウェスペルに付いていった。

彼が向かったのは昼間の鍛錬場とは違い、騎士団の宿舎の裏手にあるスペースだった。それほど広い場所ではなく、明かりも少なく、人気の無い場所である。鍛錬場はあちらではないのか、と玲音が首を傾げていると、そちらは騎士団の面々が揃っていて騒がしい、との事だった。

椅子を用意しようとしてくれるのを慌てて断って、玲音は隅に立ってウェスペルの振るう剣を見ていた。

玲音の父が学生時代に剣道をしていたらしく、彼女の家には竹刀と木刀があり、たまに父が思い出したように振るっていたが、当然ながらそれとはまるで様子が違う。ウェスペルが振るうのは、重い実剣であり刀とは違う両刃だった。

時折、月の光を反射して彼の剣が輝く。その光は美しくも見えたが、同時に空恐ろしく感じられた。

一頻り剣を振ったウェスペルは、一つ息を吐くと剣を鞘に収める。

視線は前を見据えたままで、彼は静かに口を開いた。

「……城下は、いかがであった」

「えっ！あ、えっと、見慣れないものがたくさん、あって。楽しかったです、とても…」

「そうか」

それきりウェスペルは黙り込んでしまう。玲音は沈黙の気まずさに耐えられなければ、彼から口火を切ってくれたこの状況を無駄にしたくなくて、途端に焦りが全身を巡る。玲音はこの機会を逃せば、自分から話しかけられるとは思えなかった。

「あ、あの！ありがとうございます！連れて行ってもらえて、私とても、嬉しかったです！」

必死になり過ぎて、思いもよらぬ大きくはっきりした声が出た。元の世界では出した事もないような声である。泣き喚いたときといい、玲音自身こんなに大きな自分の声をこの世界に来て初めて聞いたかもしれない。

「あ、あと、ウェスペル様のお母さんのドレスを借りた事も聞きました。ありがとうございます！そ、それで、それで私、ずっと貴方を怖い人だと思ってて、逃げてて、失礼な態度ばっかり取ってて、あの……ごめんなさい！！」

玲音は勢いに任せて言いきって、深々と頭を下げる。きちんと、謝罪と礼を言えた事に関しては自身に対し感動すら覚えたが、それでもウェスペルの反応が怖くて頭を上げられない。せめてこのくらいの逃げ隠れは許してもらいたかった。

「顔を上げてくれないか」

しばらく無言で頭を下げていれば、ウェスペルから溜息交じりの言葉を掛けられた。玲音はびくりと震えたが、恐る恐る顔を上げる。彼はこちらを振り向いており、どこかバツが悪そうに視線を逸らしていた。

「私は気にしていない。怖がらせるような態度を取っていた私にも非があっただろう。そう、指摘もされた」

「指摘？」

「鍵守であるあなたには敬意を払うべきだと思った。しかし、あなたの元いた世界やあなた自身の性格から考え、慇懃に過ぎる態度は委縮させるばかりだと言われた。フィオルだけならともかく、兄上にまでそう言われた」

玲音は、フィオルやソレイユがそんな風に自分を気に掛けてくれていた事を、初めて知った。彼女達の優しさに、胸がいっぱいになる。

「今日、ルーカスには比較的普通に接しているのを見て、その意味が分かった。そして、考えたのだが……フィオルからあなたは友人なのだと聞いた」

「えっ！」

玲音は驚いて声を上げた。玲音はフィオルに対し、友情のようなものを感じていた。しかし、彼女はこれまでまともに友人付き合いというものをした事がなく、フィオルの友人を自負するのはおこがましいのかもしれない、と思っていた。それ以上に、もしもそれが玲音の側だけの一方的な思いならば、玲音は深く傷付いてしまっただろう。憶病さ故に言いきる事が出来なかったのだ。

だから、フィオルが友人だと言ってくれていた事を知って、彼女はたまらなく嬉しかった。

「あなたはフィオルの友人で、私はフィオルの兄だ。これからはあなたを鍵守では無く、『妹の友人』として接しようと思うのだが、いかがだろうか」

何やら難しい顔をして、真剣にウェスペルが告げる。玲音は彼の言葉をゆっくりと咀嚼し、飲み込んで、それはとても素敵な事だと思った。不相応な敬意を払われる訳でもなく、王子様と異世界人でもなく、初めてできた友人の兄。一気に彼への気まずさが薄れ、親しみさえ感じるようだった。

「ぜ、ぜひ！ぜひそれでお願いします！」

思わず飛びつきそうな勢いで答えてしまい、すぐに我に返った玲音は途端に真っ赤になって羞恥で俯く。そのまま足元ばかり見ていると、ウェスペルが歩み寄って来た。玲音は窺うように、恐る恐る顔を上げる。

「では、改めてよろしく頼む。『レイネ』」

彼の表情は、玲音が見る二度目の笑みが浮かんでいた。

月光の下で（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
ようやく玲音とウェスペルが和解しました。長かった…本当に長かった！テンポよいストーリーに出来なかった私に原因があるのですが。無駄に長いです。
ここまでである意味、第一部が終了な気もしますが、話はまだまだ続きます。ので、今後ともどうかよろしくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8577t/

鍵守のレイネ

2011年11月26日01時55分発行